コンプリートデータファイル

【ムーンライトシンドローム】

Moonlight Syndrome

解析文書

薮中博章／著

白夜書房

コンプリート データ ファイル

【ムーンライト シンドローム】

Moonlight Syndrome

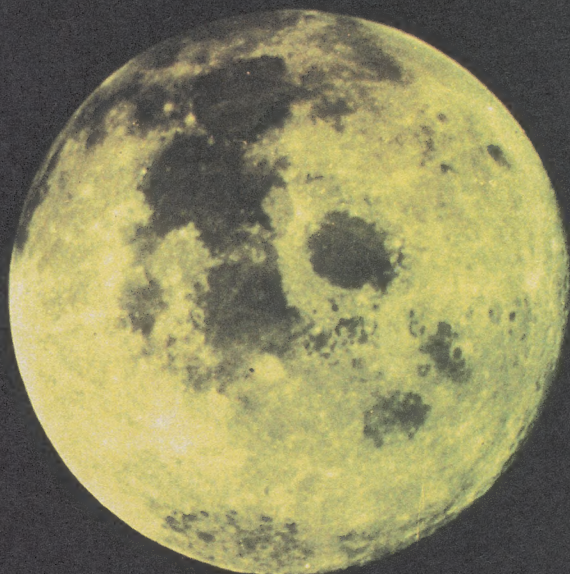
解析文書

藪中博章／著

白夜書房

Compleat-Data-File

コンプリート・データ・ファイル

【ムーンライト・シンドローム】

Moonlight Syndrome

解析文書

『導入』
INTORODUCTION

　夜道の不審者、クラブ、ストーカー、団地の事件、学校、友達、彼氏、死…。

　平成という時代。そして、世紀末と呼ばれる時代。過去から受け継がれてきた常識や正義といったものが形骸化し、何が起ころうとも不思議ではない現代。その変容を一番感じているのは、大人でもなく、子供でもない、新しいジェネレーション。独自のスタイルを確立した、女子高生だった。刹那的、退廃的、無軌道。だからこそ、今の時代を敏感に、感覚的に捕えることが出来るのだろう。そして、その舞台は「学校」という見せかけの共同体が中心となる。愛や友情よりも、快楽と惰性。現実と幻想の中で葛藤し続ける彼女たちにとって、「それ」は突然やって来た。いつもと変わらないはずの日常が、ほんの些細なズレから、予測のつかない方向へ走り出す。最初のうちは、好奇心を満たす、気分転換にしか過ぎなかったのかもしれない。しかし、「それ」は止めることの出来ない暴走だった。異常な事態と変革に、戸惑いながらも抵抗し、同化し、それぞれの運命をたどる。真実の自分とは何か。真実

の世界とは何か。ネイキッド・ジェネレーションと呼ばれる彼女らが、その言葉の本質を知る時－－審判が始まる。「学校」という、特殊な場所で。そして、「白髪の子供」の笑い声が聞こえてくる…。

その日岸井ミカは、すっかり暗くなった並木道を歩いていた。誰もいない、寂しい道。家路を急ぐミカに、誰かが呼びかける。フッ、と横切る影。しかし、振り向いても誰もいない…。

沸き起こる不安、恐怖。全てはここから始まる。まだ定着していない雛代の街に、再び何かが起ころうとしていた…。

CONTENTS

キャラクターファイル

付録／別章〜Another Story〜

登場人物

A CHARACTER

岸川 ミカ MIKA.KISHIKAWA

雛代高校二年生。一年先輩の長谷川ユカリ、逸島チサトと共に、雛代の街に潜む"噂"の真相を究明すべく、様々な冒険をしてきた。その結果、女子高生を素で演じてきたミカは、二人の先輩の影響で、意識変革をもたらす。

その一方で、ルーズソックスを履き、制服のスカートの丈を短くし、PHSは必需品、というコギャルのオーソドックスなスタイルも保っている。ある意味で、現代の象徴としての存在とも言えるだろう。「ピラミッド御殿」と呼ばれるマンションで、父母と三人暮らし。部活はラクロス部所属。

逸島 チサト CHISATO.ITSUSHIMA

雛代高校三年生。冷静沈着·慈悲に溢れた心優しい女性。ミカとユカリの三人組では、母親的な存在である。強い霊感を持ち、霊や異質なモノたちの感情を揺さぶり、解りあうことが出来る。だが、時として非情なほどクールに、シビアに物事に接する。ホットとクールの二面性を臨機応変に使い分ける、恐るべき17歳である。

鹿原アリサ ARISA.SHIKAHARA

雛代高校一年生。明るくほがらかで、良く言えばマイペース、悪く言えば少しボケている。だが、そのおとぼけが不思議な安らぎを与えているのも事実だ。同じ弓道部の先輩であるチサトを慕っているが、アリサにもチサトと同じく霊感がある。もっともチサトほど確信的で鋭く、正確無比では無いが、霊の有無は確実に捕える。ムードメーカー的存在。

長谷川 ユカリ YUKARI.HASEGAWA

雛代高校三年生。ミカ、ユカリとの三人組では、リーダー的存在。以前は学校で孤立した存在であったが、チサトだけは幼馴染みとして話をし、それが唯一のヒーリングとなっていた。そこへ突然、ミカという異物がやってくる。最初は徹底的に拒んでいたが、やがてミカを受け入れるようになった。

華山 リョウ RYOH.KAZAN

バイクの修理工場で働く17歳。高校を中退し、目的を持たないアウトサイダーの象徴。だが徒党を組む事を嫌い、自然に浮き出た存在となる。姉・キョウコと瓜二つのミカを見かけ、唯一の希望の拠り所として、言葉も交さないままミカを守る生活が始まる。

華山 キョウコ KYOHKO.KAZAN

19歳の大学生。リョウの実の姉であり、禁断の意思によって結びついている。リョウにとって最大の存在であり、大きな影響を与えている。表面的には、スミオと交際している。

冬葉 スミオ SUMIO.TOHBA

19歳・大学生。唐突な言動、衝動的な行動で人を翻弄する。キョウコだけではなく、多くの女性がスミオに身を任せてしまう。そして、数々の謎を残したまま…。

冬葉 ルミ RUMI.TOHBA

雛代高校二年生。ミカのクラスメート。リョウとは幼馴染みで、リョウの姉・キョウコと実の兄・スミオが交際している。だが、幼い頃からスミオを好いていたルミは、禁断の関係を持ってしまう。その歪んだ関係は内面の大きなストレスとなり、小学生でセックス・ピストルズ、中学生でピンク・フロイドを聞き、酒もドラッグも男もこなした。裏腹に古風な面も持つ。

白髪の少年 MITORA

謎の少年。歳にすれば6歳ぐらいというところだろうか。藍い瞳と銀の髪を除けば、無邪気でわがままな子供である。雛代に起こる様々な現象の渦中に姿を見せては消える。都市の構造と意思の流れによるものなのか、その正体はやがて明らかになる。

逸島 ヤヨイ YAYOI.ITSUSHIMA

逸島チサトの妹であるが、チサトはそのことを否定している。外見はもの静かな、しとやかな気品さえ漂うが、実は女の情念が深い、狂暴な正確である。決まってリョウやミカの前に現われ、状況をかき回し、時として残酷な仕打ちをする。その行動や言動から、謎に包まれた部分が多すぎる女性だ。

アラマタ ARAMATA

その存在は謎である。雛代高校に怪しさを感じ、自ら「変態」と分析する持ち前の「のぞき趣味」を満足させるために、ミカたちを観察している。物語の要所に突然現われ、「システム手帳」にそれまでの行動をセーブしてくれる。

高橋キミカ KIMIKA.TAKAHASHI

雛代高校二年生。以前リョウとクラスメートだったことがあり、密かに想いを寄せていた。行動的で活発に見えるが、様々なストレスを内面にため込んでいる。その発散のため、クラブ通いをするが…。

相原 カヅキ KAZUKI.AIHARA

雛代高校二年生。ミカのクラスメート。ユカリやチサト、アリサを除けば、同じクラス内ではもっともミカと仲が良い。普段は明るい平均的な女子高生だが、複雑な家庭環境に悩んでいる。

桂木 ミホ MIHO.KATSURAGI

雛代高校二年生。ミカのクラスメート。意外に攻撃的な一面を持ち、暴力沙汰で停学をくらうことも。現在引っ越しの関係で両親と離れており、ワンルームマンションで一人暮らしをしている。

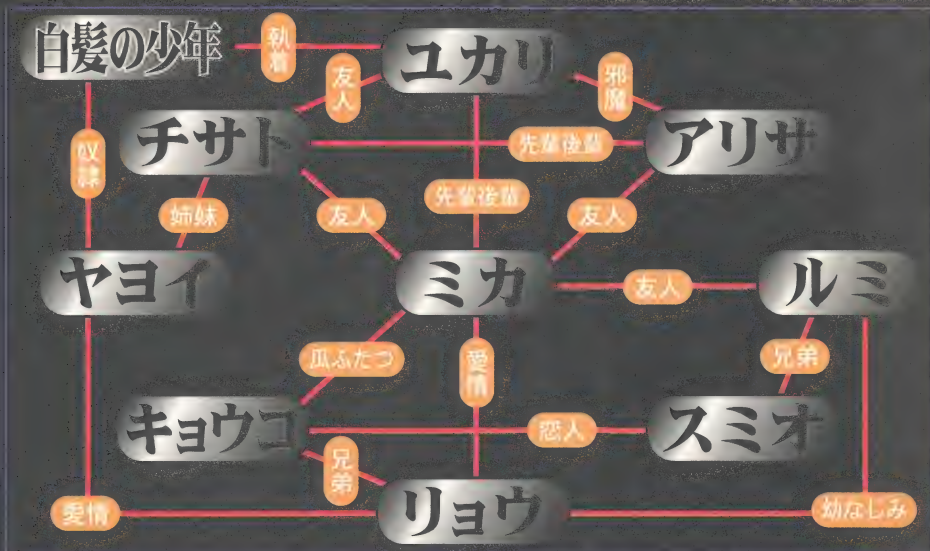
香坂 ミキ MIKI.KOHSAKA

雛代高校二年生。ミカのクラスメート。桂木ミホとは親友である。ミカに対してある種の感情を持ち、敵対視するあまり衝突することも多い。だが、やがて不幸な運命が彼女を襲う。

広瀬 先生 HIROSE.SENSEI

雛代高校化学教師。以前学校である不祥事を起こしたためか、噂にのぼりやすい。やや神経質そうで、生徒からも陰では呼び捨てにされている。化学教室にこもっている事が多く、その行動に不審な点が見受けられる。チェックしておくべき人物かもしれない。

Correlation

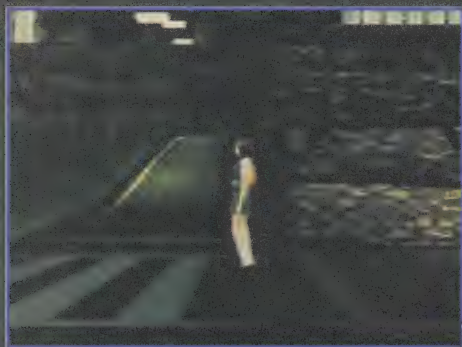
相関図

Oparation

操作方法

オープニング時
○ボタン……………………決定
×ボタン………………キャンセル
(但し、シナリオセレクト画面のみ)
スタートボタン……………決定、
　　オープニングムービーのスキップ
方向キー…………カーソルの移動
＊その他のボタンは反応しません
シナリオ進行時
○×△□ボタン……………決定、
メッセージ送り、キャラクターの走り
(意図により、走らないキャラクター
も存在する)
方向キー……選択肢カーソルの移動、
　　　　　キャラクターの移動
＊その他のボタンは反応しません３Ｄ
空間を歩いて、自由にシナリオを進め
て下さい。思うがままに…。

タイトル画面で“ＬＯＡＤ”を選択すると、シナリオセレクトがおこなえます。(但し、セーブされているクリアしたシナリオに限ります)

アラマタ手帳では、途中中断の為のセーブデータです。その為、シナリオクリアするとデータもクリアされますので、ご注意下さい。

フィールド視点

キャラクターを真横から眺める形で、舞台となる学校や街などを散策する、このゲームの基本画面。ここで、重要な人物に出会ったり、要所となるポイントにたどり着くと下記の状態になる。操作感覚は前作「トワイライトシンドローム」とほぼ同一だが、今回は奥に行くこともできる。

イベント誘発

キャラクターとの会話や、重要地点にたどり着くことで、各種イベントが発生。ここでのテキストや音声が、複雑な物語の入口になり、そして謎を解くヒントとなる。一度きりのイベントが多いので読み逃すことのないよう注意が必要だ。この積み重ねが深遠なる物語の終幕へたどり着く唯一の術。

ムービー

特に重要なシーンではＣＧだけでなくムービーで展開。本作の総ムービー時間はかなりの量になる。イベント誘発シーン同様、見逃したり聞き逃してしまうと、状況を把握できなくなる恐れがあるので、特にセリフは注意してよく聞いておくこと。とはいえ、美麗な動画に目を奪われることも多い。

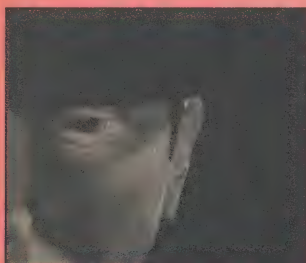
PROLOGUE

プロローグ

古いものから新しいものへ−−雛代高校の旧校舎は取り壊され、近代的な新校舎が建てられた。その高校に通う岸井ミカは、気帰宅途中不審な男に出会う。ただの変質者？　それとも…。そして、不吉な予感とともに現われたアラマタ。まるでこれから起こる事を、全て見抜いているかのように。帰宅し、自室にいるミカに電話がかかってくる。その呼びだしに応じ、深夜に家を抜け出すミカ。満月が怪しく輝く土手で、一瞬のすれ違い−−それが出会いだった。翌日、学校にいてもただ平凡な時間が過ぎていくだけ。友達との口論、不毛な時…。家では、コミュニケーションをはかろうとする父。話に適当な相槌をうつ母。どこにでもありそうな光景。「ああっ！」父の叫び。テレビのニュース画面に、ミカとそっくりの女性の顔写真が映っていた。事故。ただの偶然？　それとも必然…。ゆっくりと、何かが動き始めた。

ピラミッド御殿

　古いものは壊され、新しいものに生まれ変わる。過去に様々な謎の舞台となった雛代高校の旧校舎は取り壊され、綺麗な、しかし無機質な新校舎が建てられた。都市は、もの凄いスピードで変化していく。
　すっかり暗くなってしまった並木道を歩いているミカ。辺りに人影は無い。
「えっ？」一瞬、影がよぎり、誰かに呼び止められたような気がして振り向く。しかし、そこにはやはり誰もいない。気味が悪くなり、急いで帰ろうとした途端、ミカの前に男が現われた。
「…あなたはこの世の救世主をご存じですか？」
　不審に思うミカは、全く相手にしない。すると次の瞬間、男の姿は闇にかき消された。笑い声と、言いようの無い圧迫感。走り出したミカの帰る家は、「ピラミッド御殿」と呼ばれるマンション。ここもまた、都市の象徴である。
　そして、エントランスに向かうミカを、囁くような男の声が呼び止める。

アラマタ出現

甘い低音で囁くような声は、ダンディーな紳士を連想させる。しかし、現役女子高生であるミカにかかってはカタ無しで、「オタクオヤジ」と称される。確かに観察好きで、覗き趣味があるらしいのだが…

　マンションのエントランスに入ろうとしたミカを、低い男の声が呼び止める。周囲には誰もいない。気になって、並木道まで戻ってみると、違う男が立っていた。また変質者？身構えるミカ。しかしその男には見覚えがあった。
　男の名は、アラマタ。二人は過去に起こった普通ではない出来事を回想する…。ストーリーが進行していくうえで、アラマタは様々な場所に出没する。傍観者である彼は、その手帳にそれまでの経過を書き込む記録者、つまり、「セーブポイント」になる。

並木道からマンションのエントランスまではかなりの距離がある。ミカが自分の家に帰りつくには、必ずアラマタと会い、最後まで話を聞かなければならない。そのイベントが終了してから、エントランスに向かおう。

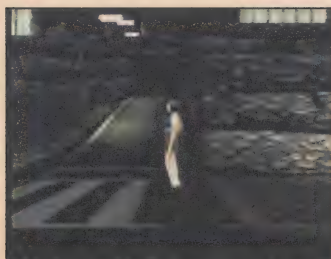
不審な男

闇からヌッ、と顔を出してきたような男は死んだ魚のような目で、ミカの選択を待つ。勧誘？それとも、異常者？会話にならない会話が、不安な未来を暗示させる。

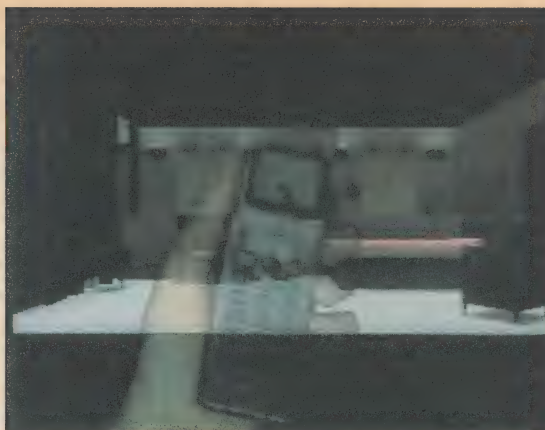
いきなり目の前に立っている、奇妙な男。焦点の合っていない目で、ミカの選択を待つ。

話しかけると、言葉少なくつぶやく。「フム…いい女だな…何もしやしないよ…何もね…」

逃げ出しても、決して追いかけられることは無い。しかし気になって戻ってみても、男はいない。どうやらこの辺りには、変質者が多く出没するらしい。

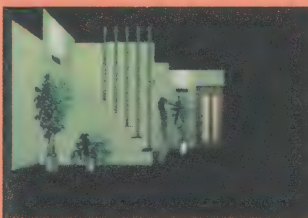
様子をみていると、男は不意に語りかけてくる。「こんばんわ、怪しいモノではありません」宗教の勧誘？そのまま聞いていると、男はミカの未に災いが降りかかる、と言う。それを助けることができるのは、自分たちだけだと…。さすがにあきれて言い返すミカ。だが、次の瞬間、男の姿は闇に消えていた。一体あの男は…？

並木道はすっかり暗くなってしまっているが、ミカの住むマンションまでは一本道なので、迷うことは無い。怪しい雰囲気に耐えられず走って帰るのも止むを得ないが、マンションの外観を観察するのもいいかも。

ミカ自宅

岸井家。一階にはリビングがあり、部屋は二階にある。マンションにしては豪勢な造りだ。だが、これも都会の常識なのか、近所付き合いはほとんど無いようだ。

疲れて眠っているミカの部屋で、夜中に鳴るＰＨＳ。今やコミュニケーション・ツールとして、女子高生にとって必須アイテム。そして、こんな時間にかけてきた相手とは…？

「ピラミッド御殿」エントランスから、トラム式の斜行エレベーターで一気に自宅のある８階まで昇る。

閑散とし、無機質な造りの通路から玄関に入ると、奥からミカの母、ミナヨが「おかえりなさい。もうご飯できるから早く着替えてらっしゃい」と声をかけてくる。入り口脇の階段を上がり、廊下の一番奥にある自室に戻ると「疲れた～」とベッドに座りこみ、そのまま夕食はパス。夜中、いきなりＰＨＳが鳴る。相手が誰で、何をしゃべっているかは不明だが、ミカの口調から推測すると、親しい男友達だと思われる。そのまま「いつもの場所」で会う約束をし、ソッと家から抜け出すミカ。家族は寝静まっている様子で、家の中はすっかり薄暗くなっている。

夜は静かに・・・・・

寝静まった家の中では、少しの物音でもよく聞こえる。慌てずに、ゆっくり歩いて抜け出そう。実際に自分が抜け出すような気持ちを持つことが大切。

さすがに女子高生であるミカを、夜中に外出させるほど両親は甘くない。特に母親は敏感に物音に気付くようなので、注意するべし。一刻も早く会いたい相手であっても、ドタバタと走ってはすぐに気付かれ、部屋に連れ戻されてしまう。ゆっくり静かに歩くべし。

月夜の土手

夜。空には月が浮かび、妖しく光っている。「いつもの場所」に向かうミカは、家をコッソリ抜け出してきたという少しの罪悪感とイベントを体験しているような高揚感、そして会いたかった相手に会えるという期待感に満ちているのかもしれない。誰もいない道を、月明りに照らされた道を進んでいく。ミカにとってこれは単なる日常に過ぎず、いつもと何も変わらないはずだった。

妖しいまでに夜空に大きく輝いている月。過去も、現代も、そして未来も黙って見続けている月。しかしそれは、不思議な力を秘めているように思えてならない。

運命が導く、すれ違いざまの出会い

やがて、誰もいないはずの土手で、ミカは一人の男とすれ違う。全身黒い服で統一したその男は、ミカにとっては異質な、いわゆる「ダサい」存在だろう。ひょっとすると、並木道に現われた不審な男と同系列の、変質者のように思えたかもしれない。すれ違う一瞬、男を見たミカは素直に思う「…なんだこいつ、気持ち悪い」

男は、接近するまでミカに対して、何の興味をも示さなかったに違いない。両手をポケットに突っ込み、背中を丸めて歩く。まるでスネた子供のような姿だが、これは男を象徴したポーズであろう。そして月明りに照らされたミカの顔を何気なく見た瞬間、その視線は釘付けになった。

「…キョウコ？…まさか。そんなわけない…」

キョウコ、キョウコ…男の脳裏にしっかりと残るその名前。期待と喜び、現実認知、絶望。男は立ち止まらない。

お互い、ほんの一瞬の出来事であった。言葉を交したわけでも、立ち止まったわけでもない。しかし、それぞれは確かにここですれ違ったのだ。それを見ていた月は、まだ沈黙したままだ。

「いつもの場所」へ着いたミカ。ＰＨＳで話していた相手は、すでに来ていた。

「ごめんね、急いだつもりなんだけど…」

クラスメートにも、家族にも見せたことの無いミカがそこにいる。一緒にいて、一番素直になれる、素直な自分を見せる相手。男は、黙っている。ＰＨＳから洩れ聞こえた明るそうな声とは、明らかに様子が違う。

「…どうしたの？　なんか、元気ないみたいだけど」

月明りは、男の背中に妖しく注がれている。その表情は読み取れない。まるで、男が男でないような、何かに操られているような…。二人の時間は過ぎていく。その時にどんな会話をしたのか、どのような行動をしたのか。夜に溶け込むその瞬間は、月だけが見ていた。

雛代高校

雛代高校全景。旧校舎は取り壊され、新校舎となった。独特のデザインは見るからに都会的なイメージではあるが、無機的だ。共同体として存在しているはずのものが、今や表装的かつ幻想的な物としての代表格であろう。

雛代高校、２年３組。女子高生にとって、コミュニケーションの手段である会話のテーマは何でもいい。ミカと友人の会話。この時のテーマは「事故」だった。

死んだのは、雛代高校の先輩。ミカ達が１年生の時、３年生だったらしい。名は「キョウコ」。どういった偶然か、彼女はミカにそっくりだという。その死因について、現場の惨状についてしつこく繰り返すミキと口論になるミカ。だが、口ではミカの方が一枚上手らしい。

廊下でカヅキより、同じくクラスメートのルミの兄がキョウコと付き合っていたと聞かされるミカ。何故か、ミカの表情は青ざめる。

いつまでたっても、いつものようなミカに戻らない。心配したカヅキがクラブに誘っても、ミカの大好きな先輩の話をしても効果がない。

帰り道、昨日不審な男と会った場所で、自分を元気づけるミカ。
「いかんいかん、弱気になっちょる。いかんぜよ、こんな事じゃ！」

ミカのクラスは２年３組。授業中以外は嬌声が飛び交う。雑談をしているのは、ミカ、相原カヅキ、桂木ミホ、香坂ミキの四人。ミキはミホと、ミカはカヅキと仲がいいようだ。

ミカ自宅前

自宅のある８階にいるミカ。前方より、近隣の住人らしき中年男性が歩いて来る。挨拶をすると、一瞬立ち止まるも、すぐにミカを無視して歩き出す。実に都会的な、他の住人に対して無関心な場所だ。無言のミカ。

玄関のカギを開けようとすると、どうした事か、カギが見当たらない。リュックの中を探ってみても、あるはずのカギは出てこない。

その時、誰かが走って近づいてきた。見ると、子供だ。
「こんな時間に子供…」

不審に思うミカに、子供は走り寄ってきて、手を差し出した。その手の中には、見覚えのあるカギがあった。
「落とし物だよ」

ありがとう、と受け取るミカ。子供はすぐに走り去って、消えた。

玄関前の廊下で、カギがないのに気がつく。リュックの中を探っても、見当たらない。困っているミカに不意に駆けてくる足音が近づいてきた。ふと見ると…。

「落し物だよ」子供が差し出した手の中には、ミカが探していた自宅のカギがあった。子供がウロウロしている時間ではない。しかもその子供は、一目見たら忘れられない、美しい銀の髪を持っていた。とまどいながらも、カギを受け取るミカ。

ミカ自宅リビング

リビング。ミカと、父と母がくつろいでいる。「学校は楽しいか？」と問う父。コミュニケーション。実は、会社の同僚の娘が行方不明になったという。身内の私生活を何も知らない、形だけの家族。懸念する父の気持ちを知ってか知らずか、ミカは応える。

「…大丈夫だよ、パパ。あたしはうまく生きてるから」

現代の若者を、女子高生を演じるミカ。母は、感覚で喋るミカの言葉を間に受けるな、と言う。微妙なズレ。世代のギャップ。

ミカは、さっき会った子供の話をする。心に引っかかっているのだろう、疑問を母に問うが、母は適当な相槌をうつだけだ。

「あっ！」

テレビのニュース番組を観ていた父が叫ぶ。それは、事故のニュースだった。峠で燃えあがるバイク。そして、被害者の顔写真が映る――その顔は、ミカであった。名前は、華山キョウコ…他人とは思えないほど似ている。そして、事故現場を中継するニュース番組の画面に一瞬映ったのは、ミカのよく知っているあの男と、子供…。

華山　響子さん (18)

キャラクターファイル #1

FILE 1

岸井ミカ

好奇心旺盛でごく標準的な女子高生。しかし少しづつ内部変革が行われている。ルーズソックスを履いた、時代の代弁者。

どこにでもいそうな女子高生。入ってくる情報に左右され、流行とされるものへの関心もある。PHSは必需品、ルーズソックスが戦闘服変わりという、典型的な今どきの女子高生だ。最近はテクノにハマり、クラブ通いもしているが、実はその本質には何ら興味が無い。多少自意識過剰な部分があるが、それもこの年頃の特徴か。格闘技、格闘ゲームが好きなようで、どうやら護身用に柔術(?)を習っている。部活はラクロス部に所属しているが、もっぱらファッション性を意識していたらしく、実際の練習などにはあまり参加していない。その一方で、好きな男の前では可愛い部分を見せたりする。それは親にも見せたことの無い、素直な感情表現なのだろう。

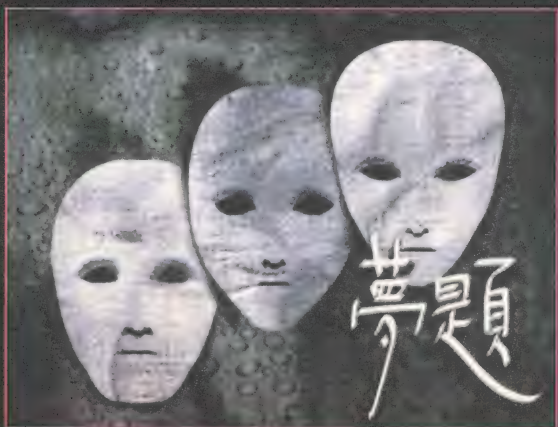
～Mika's　Words～

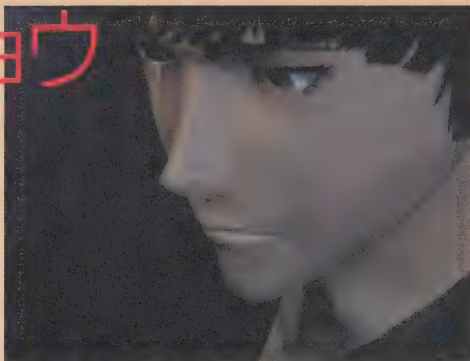
●道で不審な男に出会った後。アラマタが傍観していた事実を聞いて。**「だったら！どうして助けてくれなかったの？このナイスなバディが汚れでもしたら…アラマタだって悲しくなるでしょ？　あたしだけの体じゃないんだから…」**●夜、自宅を抜け出し、スミオに会いに行って。**「…すごく会いたかったよ。なんか懐かしい、あなたの顔」**●教室で、ミホと口論になって。**「ミホ、なに逆ギレしてんの？　あんたさ、アレだからって人に当たってる？　バカじゃないの？」**●部活が終わって部室で、全員参加の合宿の話を聞いて。**「熱血ドラマじゃあるまいしさーいまどきそーゆーのは流行んないよ。あたしはドラマは見る方に徹してるんだから」**●先生を殴って停学になったミホの話を聞いて。**「なにぃー？アタシも誰か殴って退場しようかなどーせ殴るんだったらムカツク奴にしよ」**●忘れ物を取りにいく時、アリサを誘って。**「いいでしょ！　誘ってもらって光栄だと思いなさいよ。なかなか誘わないんだよ、ミカ様は」**●団地で、ませた口をきくヒロシに向かって。**「…バカ、やめたほうがいいよ。最近、柔術習っているからメチャクチャ強いよ、あたし。…ガキが調子に乗らないの！　そういうこと言ってるとマウント取って、ボコボコにしちゃうけど…いい？」**●ナナを助けたいが、行動を起こせないタケルに向かって。**「ねぇ、キミ、ナナちゃんの事、守りたいんだったら行動しなくちゃなにも始まらないよ。リルを恐れていても何にも…」（間）「今のちょっとセンパイっぽかったな…結構イケるな、あたしも」**

MIKA KISHII

夢題

キョウコとリョウという姉弟。リョウにとってキョウコは特別な存在だ。「守るべき存在」の姉、そして「守られるべき存在」の弟。自分の存在意義に疑問を持ちつつも、甘んじて意識を変えないリョウ。しかし、キョウコの恋人のスミオに、その弱さを指摘されたリョウは、気晴しに立ち寄ったクラブでヤヨイという不思議な女に出会う。他の、刹那的な人間とは違った雰囲気を放つヤヨイに魅かれたリョウは、誘われるままに秘密の部屋に招かれる。そこではスミオがいた。「これはね、復讐なんだよ…」そう言い、ヤヨイが手にしていた紙袋が床に転げ落ちる――衝撃で飛んだ意識の中に現われた、周囲の人間の言動に、何かを感じるリョウ。だが、正気に戻った途端、待ち受けていた残酷な事実の連続。キョウコはどうなった？　スミオは？　そして、ヤヨイとは…？

MOWDEI

キョウコとリョウ

リョウにとってキョウコは、姉であり、母であり、いなくてはならない存在である。それゆえに、抱いてはならない感情すら自覚してしまう。

キョウコもまた、リョウを守るべき存在として徹底的に擁護するあまり、歪んだ形の愛情を持ってしまう。自分の全てを投げうってリョウを守ろうとする姿勢は、まさに母親のそれと同じだ。

葛藤するリョウの存在意識

リョウとキョウコの関係は、普通の姉弟と言えるものではなかった。ある意味でキョウコはリョウの母親であり、リョウもまた、キョウコに絶対の信頼感を持ち、その包容力によって安心して生きてきたに違いない。それは思春期を過ぎた今でも、リョウにとって当然の事である。だが、二人の関係に変化が起ころうとしていた。いや、それはリョウが変わるための通過儀礼であり、変わらなければならない状況になってしまったのだ。

リョウは夢を見る。そこに現われたキョウコは、いつも通り優しく語りかけてきた。

「解放して、リョウ…」

日常の認識からはずれた、自分たちだけの認識。そこでは、禁じられていた事すら正当化される。

甘え、逃避。リョウはキョウコの問いに対してすら、自分で決断を下すことが出来ない。今までキョウコに頼り、守られてきたリョウ。その自分から脱却するには、方法はひとつしかない。

「姉さんは、俺が守る。それぐらい、俺だって…」

「…バカな事言っちゃダメッ！」

キョウコが声を荒げる。

「リョウが守れないから私が守るのよ…わかるでしょう？」

肉体と精神に蔓延していく無力感。守る存在と守られる存在。いいのか？　それでいいのか…？　いつも姉さんに守られてきて、これからもずっと守られていく…それで本当にいいのか？

リョウの心は葛藤する。しかし、キョウコの言葉に、再び諭されていく。そう、俺は守られる役割なんだ。守られるんだ。そういうものなんだ…。

「…それでいいの？」「…えっ？」

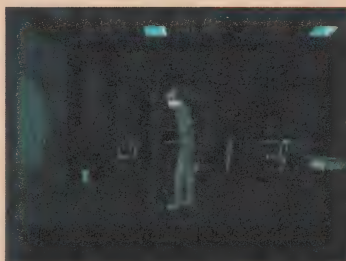
暗黙の日々は終わった。ここから始まり、そして何かが変わろうとしていた。

「リョウは頭がいいコだから、自分の限界も全部わかっている。そんなリョウだから、私はあなたが…」キョウコは、そういつもと変わらず、優しく語りかけ、微笑んだ。リョウはその身を全て委ねようとする。

だがその一方で、葛藤はやまない。守られるのが当然だったのに、守りたいという気持ちの発生。何も出来ない自分の無力さを打破しようとする自分が生まれてきた。しかし、それが本当に出来るのか？　可能なのか…？

スミオとリョウ

いきなりリョウの深層心理を見透かしたかのような発言をするスミオ。キョウコとの間に何か…？

現実に戻ったリョウの部屋に、突然スミオがやって来た。スミオは、リョウの弱さを指摘する。
「リョウ、キミはもっと自分を知るべきじゃないのか？許されない事だよ、弱さなんて…」
キョウコの彼氏からの突然の発言に、リョウはその無礼さに怒りを覚え反論するが、それも虚勢にしか過ぎない。スミオは意味深な言葉を残す。
「キミがキョウコを守ってやれ…」

キョウコの恋人であるスミオと、リョウの関係は非常に複雑な感情で構築されており、一触即発であった。

CLUB入り口前 路上

クラブ前の路上でたむろしているクラバー。どうも少し様子がおかしい。接触すると…。

スミオの妹、ルミが一人でいた。ただの散歩だと言うがどうやらリョウとはある関係のようだ。

ジャンキー二人組

クラブ前の路上にいるクラバー。その二人がどうやらバッドに陥っているようだ。リョウの事が、赤い目をしてよだれを垂らした悪魔に見えるらしく、かなり攻撃的になっている。こうなっては、もはや「人間やめますか」状態。近寄らないほうがいいだろう。ドラッグだけは絶対に厳禁だ。

ルミと遭遇

スミオの暴言をルミに話すリョウ。しかし、それ以上に、ルミもスミオに話したいことがあったようだ。どうやらわずかな間でも「恋人」としての関係だったこの二人は、非常によく似た境遇に立っている。形だけ愛しあっていても、実際はその向こうに、違う相手を見ている。その事実をルミは自覚しているが、リョウは頑として受け付けない。そんなリョウに、ルミはつぶやく。「あんたは弱者だよ…」

妙に現実的なリョウに対して、観念的なルミ。クールな口調だが、自分を理解する、理解しようとしている分だけリョウより強いのかもしれない。

地下1階はバーフロアともうひとつ、自然をディスプレイしたフロアがある。もちろんテクノがかかっているが、地下2階がヨーロッパ系テクノ主流なのに対し、コアなどのトランス系が多いと思われる。熱狂したり、リラックスしたり、レイブパーティー向けなのかもしれない。都市に住む者のヒーリングスペースなのだろう。

クラブ「LOST

雑居ビルの一階の奥に、クラブ「ＬＯＳＴ　ＨＩＧＨＷＡＹ」へ通じるエレベーターがある。その前にいる男のチェックを受け、ＯＫが出た客のみが入店を許可される。ほぼ会員制に近い状態となっているらしく、主催者は冬葉スミオだ。

地下２階にあるカウンターで料金を払う。ドリンクチケット付き、２千円。クラブ内は、いくつかのフロアに分かれており、点在する様々な人間が、それぞれ思い思いの行動を取り、不満や葛藤を訴え、逃避している。

「…いつまでやってんのよ、チケット渡して、人のスタイル難癖つけてよ。負け犬だろ、それじゃ」

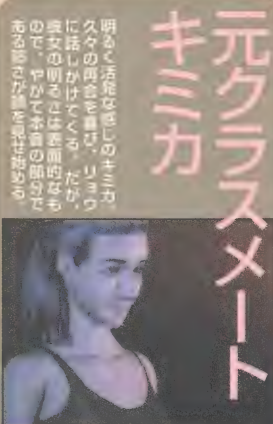
「…あたしは許さないよ。自分だけ救い求めて、そんなんで通用するわけないよ。サトルには、何の才能もないんだから」(カウンターの男女)

「…あっちいってくれ、いいとこなんだよ…音が体に流れてる最中なんだ。すげー楽しいよ…おまえも楽しいだろ？」(ロッカー前で座っている男)

奥の扉を開けて、ダンス・スペースに行くと、極彩色の照明とストロボフラッシュの光に溢れ、ハードコア・テクノが大音量で流れている。二人けの世界に溶け込むカップル、トリップしている男、踊る男女…ある意味、ここもまた弱者の集まる場所なのかも知れない。

ＤＪブースの前。心臓の鼓動と重なるビート。不意に

元クラスメート キミカ

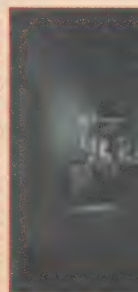
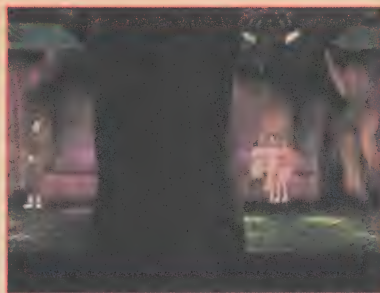
明るく活発な感じのキミカ。久々の再会を喜び、リョウに話しかけてくる。だが、彼女の明るさは表面的なもので、やがて本音の部分である弱さが顔を見せ始める。

バーフロアの一番奥にいる女が、いきなりリョウに声をかけてくる。ショートカットの彼女の名は高橋キミカ。リョウが一時通っていた高校時代、同じクラスであり、密かに想いを抱いていたらしい。キミカは次々とリョウに話しかけてくるが、妙に明るく振る舞っているように思える。周囲に注目されたいから来ているという彼女だが、それよりも何か、深いものがあるようだ。

「人ごみに埋もれたいのよ。耐えられない事ばっかりだから…こんなところにでも来ないと、なんかね、辛くてさ」

少しづつ曇っていく、キミカの表情と声。彼女の手は震えていた。

「平気だよ。もう少しだから、もう少しで…」

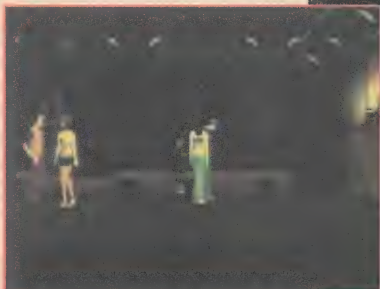
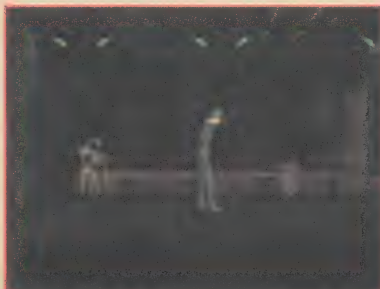
誰でも、弱さを持っている。

入り口は地下2階になる。カウンターにいる男女は、ずっと口論している。地下から逃げ出したいが逃げ場の無い現実。あとは逃避するしか無いのだ。

HIGHWAY」

一人の女が近づいてきた。
「…一人？　横にいてもいい？」
　ヤヨイと名乗ったその女性は、やたら話しかけてくる事もせず、かといってただ横にいるだけでもなかった。不思議な、変わった印象を持ってしまうリョウ。
「一緒にどこかに行こう？　上で待っているから…」
　そう言うと、ヤヨイは照明の闇の部分に消えた。スミオはその影を追って、フロアを出る。
　Ｂ１フロア。バーの周辺にはまた、幾人がたまっていた。様々な会話、様々な表情。だが、その心の奥底には、口に出すことが出来ない不安が渦巻いているのだろう。
「この街、変わったよな。都会に出る必要ないもんな」
「俺の思い出は、形にないよ」
「風習は、リサイクルされないからな」
「でも、俺はよかったんだよ。別にここが都会にならなくても…」
　現代の象徴──都会は、精神をも浸食し始めている。
「…華山？　憶えてる？　あたしだよ、高橋キミカ」
　再会。しかし、キミカも例外ではなかった。表面と内面は、恐ろしいほどに食い違っている。そして、そんな自分に決着をつけようと…。
　ヤヨイは、待っていた。そして、つぶやく。
「…キョウコの事、忘れさせてあげる」
　何故キョウコの事を？　疑問、謎、不安。リョウはそのままフロアの奥に連れていかれる。カモフラージュされていたドアが、静かに開いた。

リョウに近づく女 ヤヨイ

どう答えても、ヤヨイの思惑通りになってしまう。彼女もまた、ヤヨイと同じく「守る」側の人間なのだろうか？現に「守られる」側のリョウは、ヤヨイの後を追って──

　ＤＪブースの前で、突然リョウ近寄ってきた女・ヤヨイ。その微笑みと、ゆっくりと諭すような喋り方は慈愛すら感じる。最初は警戒し、無関心だったリョウだが、少しづつ、ヤヨイはその心を解きほぐしていく。
「…ねぇ、一緒にどこか行こう？あなたとだったら、いいよ」
　普段のクールなリョウなら、一笑に伏しただろう。だが、ヤヨイの言葉には、不思議な魅力がある。リョウは、ヤヨイを追う。

大音量のダンスフロアは、光で溢れている。その中で踊る者、ビートを肉体に取り込む者、意識を飛ばす者が漂っている。また、闇の部分では、自分たちだけの世界に閉じこもり、一時の快楽によって現実から逃避してしまうカップルも…。

隠し部屋

ヤヨイと、スミオ。この二人もまた、特別な関係なのだろう。そして、リョウの意識変革に必要な存在。受け入れる、と言うヤヨイ。復讐だ、と言うスミオ。これはほんの始まりに過ぎない。

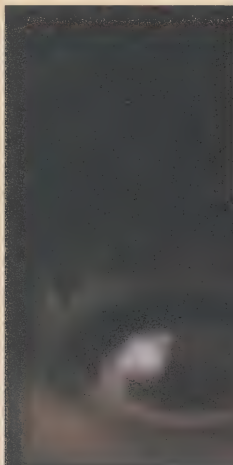
ヤヨイに連れられてきたのは、その存在が知られていない部屋だった。部屋の中央には…スミオがいた。そして、スミオの傍らに寄り添うヤヨイ。

噛み合わない会話。問答。それは、リョウにとっての大いなる試練であった。今までの、弱い自分からの脱却…。しかし、その試練はあまりにも酷過ぎた。残酷で、残忍なものだった。

ヤヨイが立っている。紙袋を抱えて。「素晴しい芸術じゃないか…ヤヨイ、よくやった…」

瞳孔が開き、意識が拡散していく。絶叫は、覚醒につながったのだろうか。

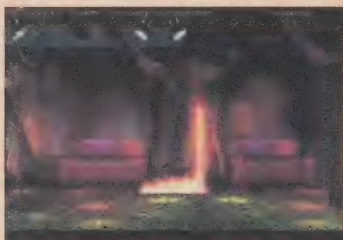
これはね、復讐なんだよ……

「キミにとって一番辛い事ってなんだ？…それを考えたよ」スミオの復讐は、リョウにとってもっとも効果的で、ダメージを与えた。鈍く、重い音をたててフロアに落とされた紙袋。赤く染まった袋から、髪の毛が無造作に飛び出て…。

無神経な人間は許さない

「LOST HAGHWAY」B1Fホール

このクラブにいる限り、スミオは「サンプル」に困る事は無い。キョウコを自分のものにしたいがための、「サンプル」を使っての確認。だが「サンプル」にされたのは弱者だけではない。予測の出来ない事態もあり得る。

フロアで後輩の女子高生に声をかけられているスミオ。それは、よく見かけらる光景だったのだろう。一晩だけの、男と女。名前すら、顔するすぐに忘れてしまうような希薄な関係──少なくとも、スミオはそう考えていた。

だが、誰もがそのルールに縛られているわけではない。キミカは、スミオのルールに対抗して、自分のルールで罪を償わせようとする。自らの命、そしてもうひとつ、祝福されない命をもって。

「紅蓮地獄に一緒に引きずり落としてやる…」自ら地獄の使者となる道を選んだキミカを、リョウは否定も、逃げもしなかった。炎の中に、二つの運命が飲み込まれていく。リョウの笑い声とともに…。

隠し部屋

失神しているリョウに向かってヤヨイは意味深な発言をする。一体彼女は何者なのだろうか？

リョウの精神は乱れ、そして失神した。椅子に座ってうなだれているリョウに向かい、ヤヨイは子守歌のように囁きかける。

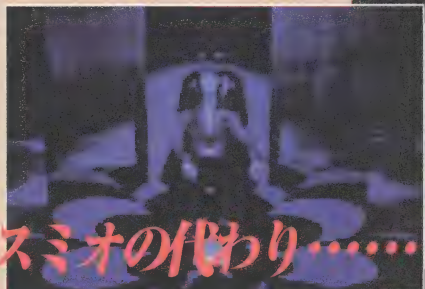
「キョウコの事も全部、私が吸収してあげる。これからは安心していいのよ…」

これはスミオの復讐の手段なのか、それともスミオですら、ヤヨイの手の中で踊らされているだけなのだろうか。その存在の謎は深まっていく。

「あなたはスミオの代わり…わたしの奴隷…」

部屋を出たヤヨイは、フロアに横たわるスミオを見つけ、看取る。その姿はまるで、スミオの魂に向かって報告をしているようであった。

「わたしには、リョウがいるから…」

スミオは果たして、この結末を悟っていたのだろうか。

草原

気がつくと、リョウは草原にいた。抜けるような青空、そして一面の緑。都会では見る事の出来ない風景だ。そして大きくそびえ立つ大木の周りには、リョウのごく近い存在である人間が集まっていた。そしてゆっくりと、語りかけてくる。

ルミ

「…見て、空。雲がすごく大きくて吸い込まれそう。…この瞬間が、ずっと続けばいいのに」

はしゃいでいる。いつもの刹那、無表情を気取ったルミとは違っていた。

キョウコ

「リョウ、ダメだよ。あなたの笑顔が見たくてここに来たんだよ。…なにも心配することなんてないよ。未来はいつだって、わたしたちに味方してくれる。どんなことがあっても、あなたを守ってゆくから…リョウ」

スミオ

「正直に生きてゆくのは確かに辛いことかもしれない。でもね…キミはこの自然を目のあたりにして、それでもまだ、偽ることはできるかい？　リョウくん…強さに臆してはいけないんだよ…キミには解る筈だ」

CLUB入り口前 路上

正気を取り戻したリョウは、「LOST HIGHWAY」を後にする。店内は混乱しており、外にも野次馬が溢れていた。そうか、スミオが死んだのか…。雨が降っている。雑踏の中に、ルミが立っていた。蒼ざめた表情だが、なんとか自分を保っている。そして、ルミの口から出た言葉は、リョウを愕然とさせた。おかしい。何かが起こっている。何かが始まっている…リョウはルミと別れると、急いで自分の部屋へ戻る。

雨が降りだしたが、路上は店を出された客や、野次馬で溢れていた。

さっき会った時より、明らかに憔悴しているルミ。だが、リョウが考えるほど、ショックを受けた様子は無いのだが…。

雨に濡れて立っているルミに、かける言葉も無いリョウ。「兄さんの口癖だったの…最近、言い出して…最初はタチの悪い冗談だと思ってたけど。…死ぬって…もうじき俺は死ぬって…そう、いつも」

自分の死を予期していたスミオ。何故なんだ!? そういえば、ヤヨイはどこに行ったんだ？

リョウ自室

リョウが部屋に戻ると、突然電話が鳴る。受話器から聞こえてきたのは、キョウコの声だった。

「姉さん、今どこにいるんだ？　スミオが、スミオがさっき…」

「知ってる…こうなることは…」

どうもキョウコの様子がおかしい。いつもとは違うか細い声が消え入りそうになり、ついには嗚咽が混じりだした。

「何があったんだ！ 姉さん！ どうしたの！」

歯切れの悪い返事。言いたくても言えない事情があるのだろうか。

「…もうすぐ死ぬの。リョウ…元気でね」

電話が切れる。スミオの死、不可解な姉の電話、ヤヨイ、紙袋…。リョウの中で、激しく交錯する数々の出来事。しかしそれらは何も結びつかず、時間や場所といった概念までもが破壊されてしまいそうになる。

「あなたは深入りしちゃダメだからね…スミオは怖い人だから」

キョウコの言葉が、頭の中に焼きついた。

「わたしがいなくても平気だよね、大丈夫だよね、男の子だもんね…」

キョウコからの不思議な電話。リョウは戸惑い、そして混乱する。キョウコ、スミオ、ヤヨイ…何が起こっているのだろうか。

……リョウ……元気でね……

キャラクターファイル #2

FILE 2

長谷川ユカリ

孤立する一匹狼—ストイックな女からぬくもりのある女へ。リーダー的存在で、ミカの憧れの対象。不良とは違ったクールさを持っている。

ミカとチサトとの三人組ではリーダー的存在。外見で言えば、制服は正しいコギャル路線を踏襲しているが、私服ではグッと大人びた格好が好みのようである。体育会系的な気質を持ち、縦の関係を重視、特にタメ口などの言葉遣いに関しては敏感に反応する。ある程度自分の世界観を持ち、あまり流行モノには左右されず、特にイベント系の遊びはほとんどしないようだ。もともとチサトとは幼馴染みで、以前はチサト以外に心を開いたりはしなかったのだが、ミカとの出会いによって外界との接触を行うようになってきた。アリサに対してもそれは同じで、口は悪いが、慕ってくれる後輩を心配し、気づかうような行動をとる。が、それを正面きって悟られるのは極力避けようとするシャイな部分がある。

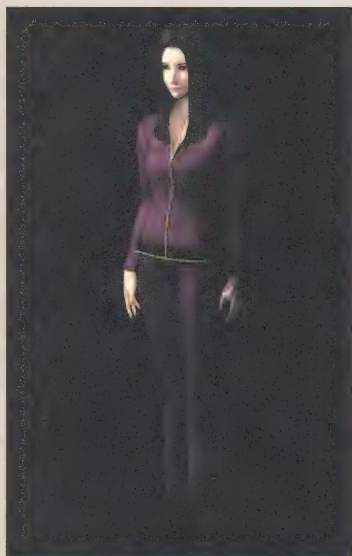
~Yukari's Words~

●ミカの「広瀬を調査しましょうよ」という言葉を受けて。「**アンタのだいじょーぶは信憑性がないからね。まるでバブルがはじける前の不動産屋みたいなんだから**」●チサトにミカがユカリに似てきた、と言われて。「**あーもー、あんなのと一緒にしないでよ、美貌に格段の差があるって！**」●ヤヨイのチサトへの悪態を聞いて。「**あたしの事は何言ってもいいけど！　あなたさ、実の妹でしょ？　もう少しの口の聞き方、あるんじゃないの？**」●団地の屋上から飛び降りようとしているナナに向かって。「**傷ついても、もう一回反動つけて戻ればいいんだよ。口でいうのは簡単だけど、実際行動に移すのは大変だよ。あたしだって、何度も気持ちが沈んで、沈みっぱなしで、這い上がれなかったよ。それでもさ、戻らなくちゃ…いつでも死ねるんだから…**」●クラブに誘う電話をかけてきたミカに。「**また、あんたはすぐそうやって流行りモンにとびついて…大体、あたしはそういう下世話な所は嫌いなの**」●クラブでテクノの講釈をするミカに向かって。「**あんた、ホントはビジュアル系のバンドが好きなんじゃなかったっけ？　普段はルックス優先で聴く音楽選ぶくせにさー、こういうとこ来たがるってのはただのカッコつけじゃないの？　ただ、大人ぶりたいために、わけもわからずこういうとこ来てるんじゃないの？(全て図星)**」●いなくなったミカがグラビアデビューを目論んでいたと聞いて。「**いくらミカでもそこまでバカじゃないって…いや、ミカならありうる**」

YUKARI HASEGAWA

SOWGUW

いつもと変わらない朝、いつもと変わらない学校、平凡な日常…。ミカにとって、刺激の無い毎日はこのうえなく退屈である。授業が終わり、カヅキから聞き出した「化学の広瀬先生の様子が変だ」という情報に、ミカの好奇心が沸き起こってくる。そこで、まだ学校に残っているユカリを探しだし、その秘密を探りにいくが…。やはり、何も変化はなかった。

　クラブ活動が終わり、帰宅しようとするミカ。ラクロス部の部室で、他の部員の話が聞こえてきた。この学校の生徒が、事故にあって死んだらしい。しかも、その生徒の死体には、首がなかったという。

　次の瞬間、人影がなくなった。一人になったミカの前に突如現われた少年。ミカの鍵を届けてくれた、あの少年だ。少年は、不吉な将来を暗示するような事を一方的に喋り、消えた…。

登校～雛代高校

ブツブツと文句をいいつつも、ゴミ出しを引き受けるミカ。ミカいわく、母は「人が急いでるときに言う」らしい。これもひとつのコミニュケーションの形なのかも…。

いつもと変わらない日常。このまま何も起こらず、時は流れていくはずだった。だが、偶然は必然となりミカの周囲は歪んだ現実に翻弄される事に。

ゴミを捨てに行ったせいかどうかは分からないが、チャイムが鳴り、授業開始ギリギリに教室に滑り込むミカ。遅刻は常習のようだ。

ゴミ出しで始まる一日

平凡な朝が、今日も訪れる。家を出るミカに、母はゴミ捨てを頼む。ブツブツ言いながらもゴミ袋片手にエレベーターに乗り込むミカ。案外、母とのコミニュケーションになっているのかもしれない。

そして、登校。始業チャイムが鳴り、２年３組では出席を取り始める。「岸井…岸井はいないのか？」

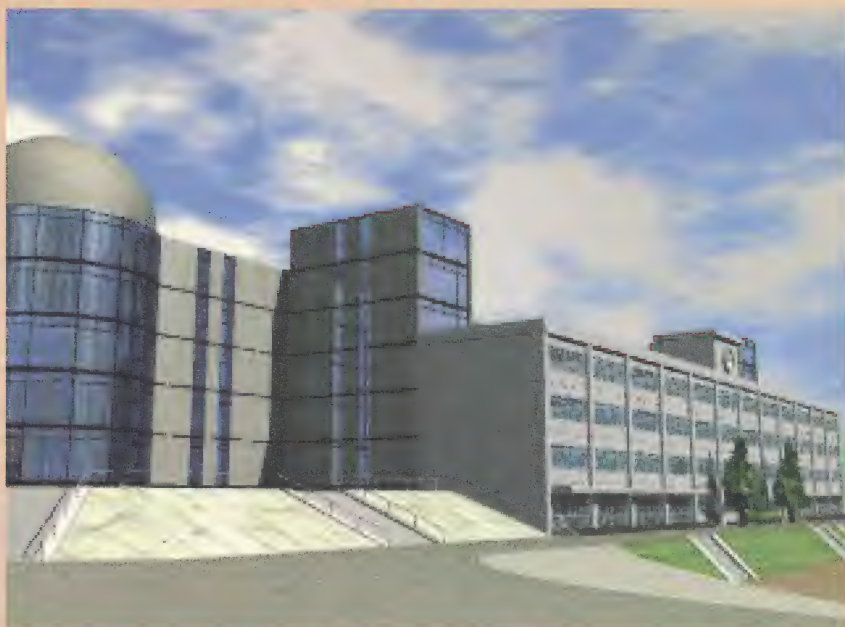
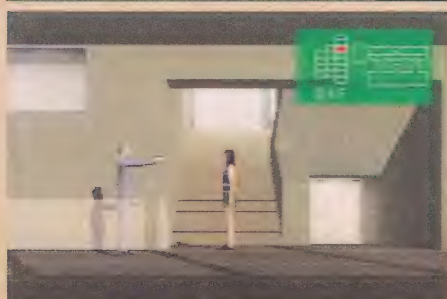
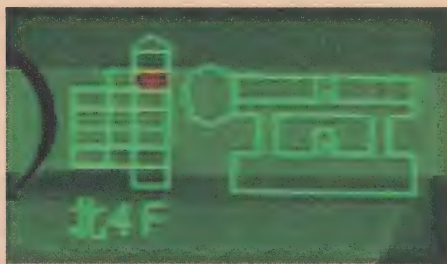
廊下を走り、ギリギリ間に合うミカ。常習らしく、先生もあきれ顔だ。小声でカヅキと囁きあい、授業が始まる。学校も、いつもと何も変わらない。だが、好奇心旺盛なミカが、このままおとなしく一日を過ごすはずがない。放課後、ミカはカヅキと雑談にふける…。

面白い話

カヅキに「面白い話」を聞いても、何も思いあたらない様子。しかし、二度三度としつこく聞き続けると、何かを思い出してくれる。廊下ですれ違った化学教師の広瀬の様子が変らしい。なんでも、何かにひどく怯えているような感じだったというが…。それはきっと何かある、と断言するミカ。その手の情報に最近植えていたらしく、さらなる情報収集のために、先輩であるユカリのところへ向かう。ただし、カヅキより情報を得ていないとなかなかユカリに会えなかったり、ミカの話に取り合ってくれなかったりするので注意。根負けして、帰宅してしまうことのないように。

お互いの家庭事情を語り合うミカとカヅキ。だが話題はすぐ途切れ、ミカは「何か面白い話ない？」とカヅキに詰め寄る。一度ぐらいの詰問では、さすがにカヅキも何も思いあたらないが…。これからの予定を聞いてカヅキはこれから部活だと言う。暇になってしまったミカは、お気に入りの先輩に会いに行こうとする。教室を出ると、鹿原アリサが駆け寄ってきた。「明日の約束、覚えてる？」すっかり忘れていたミカに、アリサは約束を再度確認して去っていく。

好奇心旺盛なミカだけに、すぐにあきらめずにしつこく食い下がってみよう。やがてカヅキが何か思い当たる話をしてくれるかもしれない。

雛代高校 校舎

雛代高校は地下１階、地上５階の旧校舎と新校舎からなっているが、北側と南側では斜面に建設されているために階数の誤差が生じ、旧校舎の地下１階が新校舎の１階とされている。旧校舎と新校舎は連絡橋で結ばれており、自由に行き来が出来る。新校舎の一端は円柱状の造りになっており、１階に受付があり、校長室のある５階までは吹き抜けになっている。外観上もっともインパクトのある構造だ。

校舎内移動時には、自分の所在地が赤い印でマッピングされる。さらにイベント進行上重要なポイントは、青の表示でマークされる。

移動時は左右と前後（奥行き）の移動が可能、走ることも出来る。教室などに入りたい場合には、その入り口にキャラクターを接触させればよい。

二つの校舎や階数の誤差、似た作りの教室など、混乱を招きそうな構造を画面右上の簡略化されたマップで把握しなければならない。慣れないうちは迷ってしまうかもしれないが、ソフトに付属しているマニュアルにも、校舎内の各フロアマップが掲載されているので、画面のマップと合わせて見ることでかなりわかりやすくなるはずだ。

小さなマップではあるが、自分のいる現在地や、イベントの発生する重要ポイントの表示など、物語をスムーズに進めるために必要な情報もここから得なければならない。出会ったキャラクターとの会話だけでなく、マップにも常に注目しておきたいところだ。

ユカリとミカ

特別講習に行くでもなく、屋上で寝そべっていたユカリ。ミカも並んで寝そべってみると、青い空と白い雲が…。

ユカリに会うために三年生の教室に向かうミカ。だがそこにはユカリはいなかった。逸島チサトの話によると、受験生であるチサトとユカリは、これから放課後の特別講習があるらしい。ユカリのカバンはあるので、校内にいることは確かなのだろう。ミカは、ユカリを探して校内を歩き廻る。だが、放課後になってすでに鍵をかけられた教室もあり、立ち入り禁止の場所もある。先生に注意を受けたりしながら、やっとユカリを発見。
「先輩、結構ヒマ人なんですね」
「バーカ、特講だよ。あたしは受験生なんだからね」
ミカは、カヅキに聞いた広瀬の話をして、怪しいから調査しよう、と持ちかける。だが、取り合わないユカリ。ミカは単身化学室に向かうのだが…。

挙動不審な広瀬

問題の化学室。ミカが来た時には扉にカギがかかっていたが、今度はかかっていない。中の様子を伺う為に、ソッと開けてみる。

中の様子はわかりにくいが、白衣を着た広瀬が落ち着きなくウロウロしている。一体この中で何をしているのだろうか？すると突然、姿が見えなくなって…。

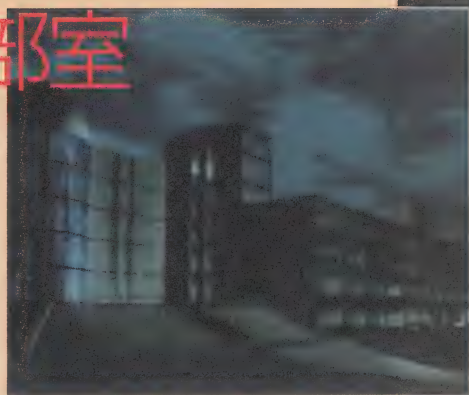
勢い良く扉を開け、飛び出して来た広瀬。ミカによると、凄い形相をしていたらしい。慌ててその後を追いかけていくと…。

化学室に向かったミカ。しかし、教室の扉にカギがかかっており、中に入る事が出来ない。様子を伺うと、確かに中から人の気配がするのだが…。ユカリのもとへ取って返したミカは、怪しい化学室を一緒に調べてくれと頼む。「めんどくさいなー」と文句を言いつつも、特別講習をサボッたユカリはミカに付き合う事に。
化学室にやって来た二人。今度は、扉に鍵はかかってないようだ。中にいる誰かに気づかれないように少しだけすき間を開け、ユカリが様子を伺う。すると、左右に行きかう白衣の人物がいる。どうやら広瀬らしい。
「あっ…なんかウロウロしてる」
そして、広瀬の動きが序々にせわしなくなってきた瞬間、突然視界から消えた。
「あれっ？いなくなった」

広瀬の行き先は男子トイレだった。呆れるユカリにミカは言う。「これはきっと我々を油断させるためのカモフラージュ…」

ラクロス部 部室

広瀬の一件で呆れてしまい、帰ってしまったユカリ。ミカも仕方なく、来たくしようと校舎を出る。すると、ミカが所属しているラクロス部の友人が声をかけてきた。
「また部活サボる気じゃ無いでしょーね、今日こそは逃がさないからね」「ちょーど今から部に出ようと思ったところだってば」
調子良く言い訳するミカ。そのまま友人と共に、部活に参加する。そして、練習が終了し、ロッカーの前で着替えていると、他の部員の話が聞こえてきた。

練習後、部室で着替えるミカ。近く全員参加の合宿がある事を聞き、「見る側に徹するよ」と弱音をはく。

「ねー昨日のニュースみた？」「ウチのガッコの奴が死んだって」「話によると死体のクビだけが発見されなかったって…」
えっ…？その瞬間、部室の中にはミカ以外の誰もいなくなった。ドアも、窓も開かない。
「…ここには誰もいないよ」
突然現われた少年。わけのわからないミカに、少年は一方的に語りかける。ミカの身に、これから災いが降りかかると…。

突然誰もいなくなった部室に、少年が現われた。ミカのマンションで、鍵を拾って届けてくれたあの少年だ。

少年は、ミカに忠告しに来たという。生意気に、と怒るミカ。だが、少年は一方的に話し続ける。「これからミカねーちゃんの周りでいろいろな事が起きると思うよ。もう予め決まっている事なんだ。そう、あの時から。あの時に運命が決まった…」

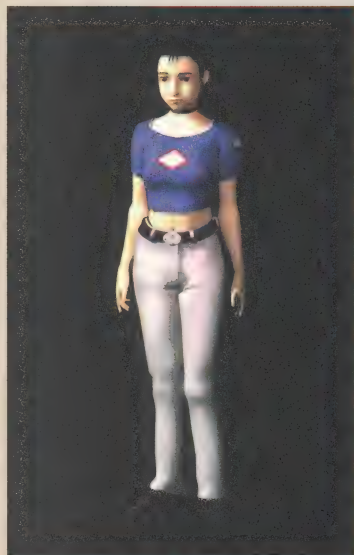
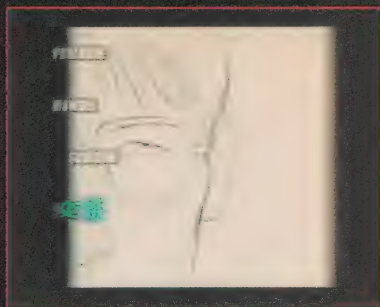
キャラクターファイル #3

逸島チサト

落ち着いた雰囲気で優しさを持つが、実はクールな一面も。冷静沈着・母親のような包容力でミカたちを見守る。

もの静かな性格で非常にていねいな口調でしゃべる。後輩たちの間でも人気があり、慕われやすい。アリサとは弓道部の先輩・後輩関係。しとやかなイメージだが、その反面いくらミカやユカリでも軌道がはずれた場合、冷たく突き放す。それは本人のためを思っての手段でもあるのだが、普段とのギャップがあまりにかけ離れているので、二面性を持っているようにさえ映る。また、ヤヨイとの関係や強い霊力など、ユカリですら知らない部分が多く、謎に包まれている。ある意味では達観しているような17歳だが、ミカの中には特別な存在であるらしく、ミトラの見せる悪夢の世界によく登場した。

～Chisato' s Words～

●ストーカーに襲われたミカを救出して。「わたしとユカリちゃんがミカちゃんのことずっと守ってあげるから…心配しなくてもいいよ」●タメ口を聞くアリサに対して怒るユカリに。「悪いコじゃないから、ユカリちゃんも些細な事でカッカしちゃいけないよ」●本当はミカの事が心配でしょうがないユカリに。「恋人同士みたいだよ、ユカリちゃんとミカちゃんって。だから気になるんだよ…仲がいいね」●ユカリと、ユカリに悪態をつくヤヨイに対して。「…ユカリちゃん、ごめん。嫌な思いさせるつもりじゃなかったんだけど…ヤヨイ！　ユカリちゃんの事、悪くいうのは許さないよ」●屋上のナナに向かって。チサトに、何かがダブる。「ダメッ！絶対にダメだよ！　死んじゃダメなんだよ！…あっちの世界は冷たくて、とっても怖いところなの。最初だけ、暖かいのは…みんな元の世界を恋しくなる…怖いんだよ、とっても怖いところ」●チサトに対して怒りを爆発させる。「自分のしたこと、向こうで考えていなさい。(ユカリに) 手は出させない…黙りなさい…あんたに発言権はない！　覚悟しなさい…」●カヅキの不幸をユカリに伝える。「ユカリちゃん、あたし、なんだか怖いの。あたし達の知らないところで、なにか得体の知れない力が働いてるように思えるの。なにかいやな予感がするの…」●ユカリを叱責する。「ダメだよ、ユカリちゃんお人好し過ぎる！なんでそんな簡単に騙されるの？…絶対に、ダメ！…こいつだけは許しちゃいけないの」

CHISATO.
ITSUSIMA

一陣の風は、妖精の悪戯・そんな話をチサトに聞いた日、帰宅途中で起こった悪夢。あの優しいチサトが、目の前に立っていた。しかしその姿は、血まみれだった。混乱、錯乱。そしてまるで導いてくれるように現われる男、リョウ。

ミカの悪夢は、アリサからの電話で終わった。待ち合わせに遅れ、急ぐミカにつきまとう誰かの足音、不審者の群れ…。何かがおかしい。

霜北の街で、ルミはミカの信じる友人との関係を「偽善」と言う。そして謎の女・ヤヨイもまた、否定する。守ってくれる存在がいない状況で、ストーカーに襲われるミカ。その後を追うリョウの前に、少年が現われた。その少年に会った瞬間、リョウは理解する。

そして、守るべき存在に…。

HENSHITSU

雛代高校前

登校するミカを、一陣の風が襲う。それはただの風ではなく、以前どこかで嗅いだ事のあるような香りを運んできた。学校前でユカリとチサトに会ったミカは、それを伝える。するとチサトが、それは妖精のイタズラで、幸せそうな人を見ると金粉をかけるのだと言う。ところが、その先を言おうとした瞬間チサトは口をつぐみ、急に帰ってしまう。

ミカが体験した不思議な風は、妖精のイタズラだと言うチサト。幸せな人を見ると、妖精は金粉を振りかけるらしい。そして、金粉をかけられた人は…そこまで話すと、チサトは急に黙り込み、帰宅してしまう。不審な様子に、残された二人は戸惑う。

覚えているか……逢いたかった、あれから……

「おまえを守る為に来た。月の悲しみが溢れる時、2頭の禁欲な馬に見守られて…すべてを許せる人に」リョウがつぶやく。一体何を意味し、暗示しているのだろうか。

チサトの様子がおかしかったのが気になるミカは、土手を一人で歩いている。夜空には、満月が輝いている。すると、前方に黒い男の影が…それはリョウだった。

リョウはつぶやく。「覚えているのか…」だが、今と同じ、満月の土手で一瞬だけ目を通わせた事を、ミカは忘れてしまっているようだ。逃げ出すミカ。リョウは意味深な言葉を吐くと、そこから姿を消した。

やばいよコイツ、近づかないでよ!!

住宅街

帰宅途中のミカに異変が起こる。時間や空間が歪み、一時的に精神が錯乱する。何かを感じたのか、「スミ…」とその名前を言いそうになった時、目の前にはチサトがいた。夕暮れの住宅街。チサト。しかし、チサトの制服は血まみれだった。

「ミカちゃん、いらないんだよ。もう誰もいないよ、帰っても」

「…この格好、なに…なにしたの!!」

チサトの言っている事が理解出来ない。ミカの中で、次第に高まってくる怒りと…殺意。混乱する選択の中で、チサトは消え、リョウが再び現われた。

「あなたなの？あなたの仕業なの？」

リョウは静かに答える。俺じゃない、と。記憶に無い思い出が、ミカを混乱させているという。そして、ミカを襲う「何か」から守るべき時が来た、と…。

「あなたは…」ミカの問いかけにリョウは「もうじき会える、必ず…」と答えた。全てが消える。どこかで電話が鳴っている。

血にまみれたチサト。ミカに、家に帰っても、誰もいないと言う。「みんな、泣いてたよ。泣き叫んでね、暴れてね、惨めだよ。ヘンな顔して、フフッ、バカみたい…」理解出来ない状態の中、ミカの怒りは高ぶり、殺意を覚える。

ミカ自室

電話の相手は、今日約束をしていたアリサから。すでに待ち合わせの時間は過ぎている。急がないと…。

段々大きくなっていく電話のベルで、ミカは夢から覚める事ができた。それにしても、後味の悪い夢だった…不快感が残っている。

夢から覚めるミカ。電話が鳴っている。急いででると、相手はアリサだった。
「…あの～、今何時でしょうか？もう疲れちゃったよ～」
今日はアリサと約束があった。ルミも一緒だ。「ルミ、怒ってる？」と恐る恐る聞くと、呆れて勝手に買い物をしてると言う。ケーキとランチを奢る約束をし、待ち合わせ場所を決めて電話を切る。急いで支度をすませ、母に声をかけて自宅を出る。20分で待ち合わせ場所まで行かなければならないのだ。

住宅街

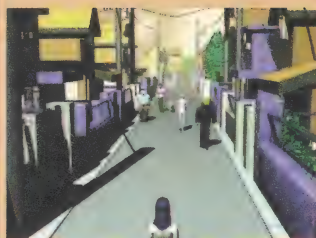
住宅街 吠えかかる犬。飼い主の目はミカを捕え…

アリサたちとの待ち合わせ場所に急ぐミカ、住宅街にさしかかると、誰もいないはずなのに、着けられている気がする。早足になると、突然目の前に犬が現われた。牙を剥き、狂暴そうだ。

急ぎ足で住宅街にさしかかるミカ。だが、何か様子が変だ。注意してみると、自分以外の足音が聞こえてくる。立ち止まり、振り向いても誰もいない。早足になる。だが、足音はぴったりと着いてくる。
目の前に、いきなり犬が現われた。ミカに向かって牙を剥き、激しく吠える。
「こらっ！静かに！人に向かって吠えちゃ駄目だろ！」
飼い主らしい青年が犬を制止し、ミカにあやまった。そのまま立ち去る青年と犬。だが、青年の目は…。

飼い主に制止された犬は、すぐにおとなしくなる。バイオレーターという変わった名前の犬は、よく見ると飼い主を非常に怖がっているよう見えるのだが…。

飼い犬の非礼を詫びる青年。その口調は礼儀正しいが、ミカを見る目が少しおかしいような…。だが、そのまま犬とともに立ち去っていく。気がつくと、足音は消えていた。

住宅街の一角に集まっている不審者たち。それぞれが一クセも二クセもありそうだ。無事に通り抜けられるのだろうか？

さらに住宅街を進んでいくと、前方に何やら不審な人物が数人、たむろしている。それらは全員、ミカが来るのを待ち受けていたかのようだ。見渡しただけでも、ホームレス風の男、ステロタイプのオタク男、そしてサイケなメイクの危なそうな女…。心配しながらも、進むしかないミカ。だが、不審者たちはこぞってミカに近寄り、からかったり話しかけたりしてくる。ここはうまく切り抜けないと、待ち合わせ場所には行けそうもない。

不審者の集まる道

ホームレス風の男。「おい！子供がどこいくんだ！俺も連れていけよ」とからんでくる。

オタク風のデブ男。「キミ、女子高生？チョーカワイーねー」とナンパしてくる。性欲と自己顕示欲の固まりのような奴だ。

ネグリジェ姿の女。ある意味一番危なそうだ。「わたしのベビー、どこいったの？返してちょうだい！」と迫ってくる。恐い。

脱出ポイント

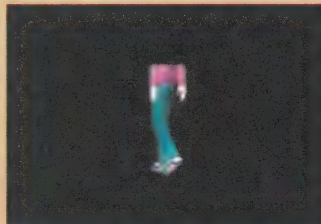
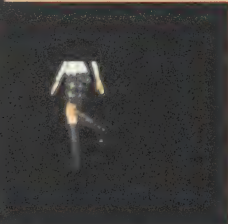
ホームレス：話しかけられても相手にしない。応じると…

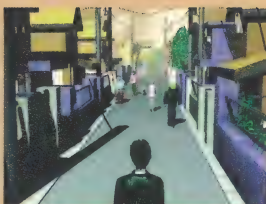
オタク風の男：かなり危なそうなので、すぐには逃げずに話しをする。やがて調子に乗ってくるので、すかさず攻撃。有効なのは追いかけてこられなくなるような技。例えば足を…

女：見るからに危なそうな表情。彼女の話を聞き、できるだけ刺激しない。嘘も時には方便なので、怒らせないように…

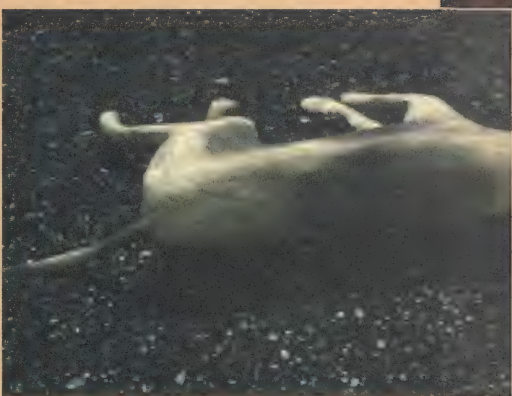
迫る足音

不審者から逃れたミカだが、しばらくすると再び何者かの足音が忍び寄って来る。気持ち悪いのはわかるが、決して立ち止まって振り向いたりしないようにしたい。徹底的に無視して、最後は走って振り切ってしまわないと、延々と…。

確かにミカを着けて来る足音。ひょっとして、今流行のストーカー…？　決して振り向いたりしてはいけない。存在を無視して、どんどん進んで行こう。恐怖のあまり逃げ出そうとすると転んでしまい、延々とつけられることになってしまう。

ミカのあとを追うリョウの前にも、不審者が立ちはだかる。あきらかに、何かが起ころうとしているようだ。

「…どこへ行った?」自分の使命を自覚したリョウは、ミカを探すが見当たらない。ミカは無事なのか?

ミカを探すリョウの前に、犬の死骸が転がっていた。その犬は、リョウは知らないが、確かにバイオレーターと呼ばれていた飼い犬のはず。という事は…。

霜北の街

何者かの足音からも逃れたミカは、待ち合わせ場所である霜北の街にやっと到着する。霜北駅を出ると、街は左右に広がる形で商店街になっている。電話で決めた待ち合わせ場所を探しだし、アリサやルミと合流しよう。万が一、店の名前を忘れていたとしても、一軒づつ探していけば問題無い。

「待ち疲れちゃった~」と言うアリサ。ミカに言わせれば、まだまだ子供だというが…。

待ち合わせの店に行くと、アリサが待っていた。すでにたくさんの買い物をしてしまい、遅れた罰として、ミカを荷物持ちに任命する。だが、ルミの姿は無い。アリサに聞くと、どこかに行ったままだという。とりあえず、ルミを探す為に一人で行動するなら、アリサとの待ち合わせ場所を決めておかなければならない。二人で行動するなら、早速街に出よう。ところが外に出た瞬間、すれ違った男に反応するアリサ。聞くと、女子高生キラーとして大人気のプロレスラー・バイオレンス河野だという。その河野の後をダッシュで追いかけていくアリサ。結局ルミは、ミカ一人で探さなくてはならないようだ。

兄・スミオの死によって苛立ち、ミカに突っかかっているのか、それともスミオとミカの関係について口論の末、ルミは立ち去る。

ルミとの衝突

レコード店前で、ルミを発見。遅刻を詫びるミカだが、ルミはいたってクールで、キツい皮肉を。そのまま二人はアリサと合流する為、待ち合わせ場所である店「RANK」に向かう。だが、店内には人気が全く無い。仕方なく手分けして探そうとするミカだが、ルミのちょっとした言動から口論になってしまう。信頼して、助け合うのが友達だと言うミカに対し、そんなものは偽善に過ぎない関係だと言うルミ。ついにミカは、死んでしまったスミオの名前まで口にしてしまう。「お兄さんがあんな事になったからって…」しかし、秘密にしていたはずの二人の関係をルミは知っていた。

ストーカー出現!!

アリサを再び探すミカ。突然そこに、ヤヨイが現われる。「岸井ミカさんね、探したわ…」「誰？」「逸島ヤヨイ…」「逸島…って？　まさか…」

ヤヨイはチサトの妹だった。だがこの姉妹はまるで性格が違っていた。そして、実はアリサに頼まれてミカを探しいた、と言う。不信感はあるが、ヤヨイの後に着いていくミカ。

いつしか、ヤヨイの姿は見えなくなっていた。そして、またあの足音がミカに迫るが、今度は正面きって迫ってくる。ストーカーだ！　何とか逃げ切った時、ヤヨイが現われた。怒りをぶつけるミカ。だが再びヤヨイは消え、ミカの前にはストーカーが立っていた。ミカはその場にへたり込んだ。

ヤヨイはチサトの面影があるが、性格は正反対と言ってもいいようだ

ストーカーがミカを襲う。捕まったら、何をされるかわからない。逃げろ！

ミカは……？

霜北の駅を降りるリョウはヤヨイと再会する。「LOST HIGHWAY」以来だが、リョウはあの悪夢を忘れてはいない。

ヤヨイの微笑みが邪悪に見える。リョウがミカを守りたい事、ミカが誰かに守られたい事、ヤヨイは全てを知っていた。

ミカを守る誰かの存在

ミカの後を追って霜北にやって来たリョウ。そこで待っていたのはヤヨイだった。

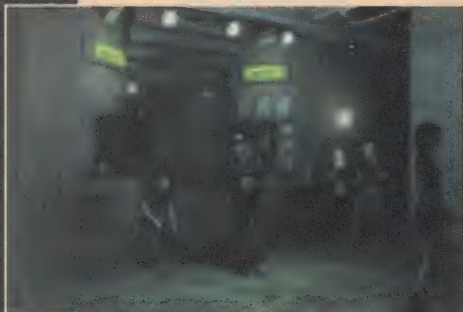
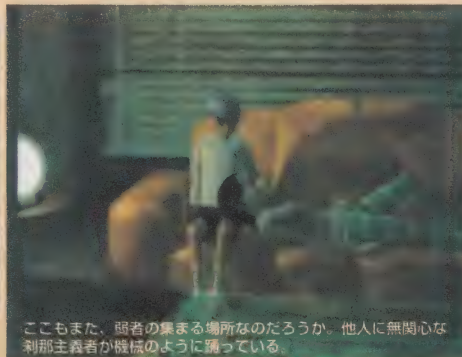
「久しぶりね…誰を探しているの？」「キミには関係無い…ほっといてくれ」

しかし、ヤヨイは知っていた。リョウがミカを守ろうとしている事を…。会いたい人がいるから、ミカをそこまで連れていったと言うヤヨイに、リョウは詰め寄る。

「…答えろ、何を企んでいる！」

ミカは、守って欲しい、そして、誰かが守ってくれると言っていたらしい。

「あなたが守ってあげるんじゃないの？」

挑発的なヤヨイは、リョウをショッピングモールの地下へ導く。通路の奥には、大きな鉄の扉があった。それは、軋みながらゆっくりと開いた。

ミカを探してモールの地下に入り、目の前に現われた鉄の扉を開ける。ミカはどこに…。

ここもまた、弱者の集まる場所なのだろうか。他人に無関心な刹那主義者が機械のように踊っている。

ストーカーがミカに忍び寄る。無力である事をわからせる為なのか、それとも別の目的があってか…。ミカが今、汚されようとしている。守ってくれるものはいないのか？

ミカの最大の窮地に、ユカリとチサトが駆けつけた。やはり偽善などではない、確かな関係で結ばれていたのだ。

友情は偽善などではなかった

暗闇。閉鎖的な空間。ミカは失神している。闇の中から男の顔が浮き上がり、その息づかいは序々に荒く、激しく、大きくなっていく。ここには、ミカを守る存在はいない。無防備なまま、その全てを侵害されようとしている。

やはりヤヨイが言ったように、この世界はこういうものなのだろうか。

ルミが言ったように、今までの関係は全て偽善だったのだろうか…。

ストーカーがミカに触れようとし、その気分が絶頂に達した時、扉が開き、光が差し込んだ。

「ミカ!!」そこにはユカリとチサトが立っていた。ミカが信じていた、守ってくれる存在の確かな証だった。

そこにはヤヨイと－－その膝枕でくつろぐ少年がいた。言葉は無い。ヤヨイと少年…ミトラ。リョウにはその瞬間に全てがわかった。キョウコの事、スミオの事、そしてミカの事…。

リョウの中で、何かが確実に成長した。

「許さん…絶対に許さんぞ…」

ミトラは起き上がり、冷笑を浴びせながら言う。

「無理無理…無理だよ、何も出来ないよ…」

「おまえら…ふざけるな…」

ミトラの笑いが響く。リョウの形相が変わった。

無理無理……
無理だよ、何も出来ないよ……

ストーカーは警察に逮捕された。ミカは、ユカリとチサトによって守られたのだ。だが、連行されるパトカーの中で、犯人は舌を噛み…。

冷笑するミトラ。邪悪さが序々に頭をもたげ、本性を見せ始めた。リョウはミカを守れるのか？そしてミトラとヤヨイの関係は…？

キャラクターファイル ＃4

FILE 4

鹿原アリサ

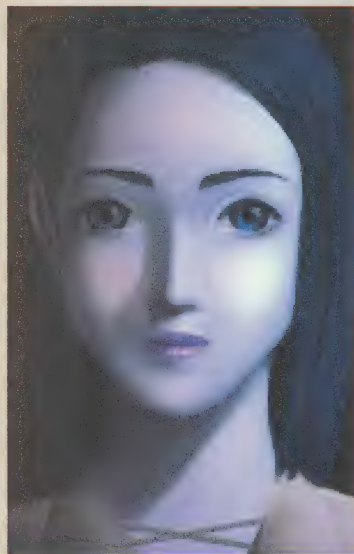
天真爛漫、マイペース。決して流行に流されず、自由な発想を持つ。子供の心は、時として周囲とのズレを招くが、そんなことは気にしない。

大人と子供の境界線といえる高校生の中で、行動や言動だけで考えるならアリサは間違いなく子供だ。先輩や目上の者に敬語を使わない、いわゆるタメ口をきくが、それは余計な縦社会構造の否定にすぎない。いつも宙に浮いている感じだが、天真爛漫というより少しボケていると言った方が的確か。ミカと行動する事が多いが、ユカリにとってミカがそうであるように、ミカにとってのヒーリング・キャラクターであろう。ムードメーカーとして大切な存在だ。だが、まれに物事の本質をつくような発言をしたりするのであなどれない。また、チサトほど確信的ではないが不思議議な能力を持っている。

ARISA KAHARA

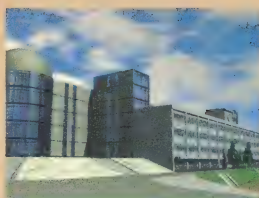
～Arisa's Words～

●待ち合わせに遅刻してきたミカに対して。「ミカ、荷物持ちして～、遅れた罰！　今日はアリサの買い物に付き合うの。当り前だよ～、更に遅れること３０分！…どう説明するんでしょう？」●意外にもＰＨＳを否定するアリサ。当たり前のように持っているミカは反論するが…。「ミカの世代はこれだからダメなの～。わたしたちの世代は、どれだけ個々の時間を大切にするかがテーマだから、そういう退化の玩具は必要ないの」●ミカたちとの団地前の待ち合わせに遅れてきたアリサの独り言。「あれ～、ミカいない…どこにいったのかなぁ。せっかく急いで来たのに、ミカも遅れてるのかなぁ。こんなことなら、ゆっくりキンキみてくればよかった。せっかく光一がヅラ被る姿見れたのに…そうか、ママに頼んでおけばよかった。どうしよう、電話…こんな時、ミカがいればすぐに電話できるのに～。使えないな～、ミカって本当に頼りにならないよ」●地道に生きる事を否定するミカに。「ミカ、情報に踊らされすぎ！　そんなスタイルだけで自分誤魔化すのは負け犬のすることだよ。コギャルの世代と一緒にされたら、アリサたちが迷惑するんだから」●ミユキを探しにいったまま戻らなかったアリサを見つけたユカリに。「アリサはミユキを探しに行ってたんだけど、見つからないしおなか空ったんで、購買でカップラーメン買って屋上で食べてて。そーしたら眠くなってきて、いままで寝てたの」

片倫

HENLIN

欠伸が出るほど単調で平凡な毎日。今日もそんな一日になるはずだった。
ミホが一週間の謹慎処分になった。先生を殴ってしまったらしい。
学校や教師に対する不満を持つのは、どんな高校生でも同じだ。
その話題に興じている時、廊下をあの子供が走り去った。
気になるミカは、その後を追いかけようとする。
だが、学校がおかしい。造りがおかしい。
まるで空間が曲がってしまったようだ。
やっとのことで子供を見つけた。子供は、
ミカの教室に入って行った。後を追って入る。
そこは教室ではなく、もやのかかった森だった。
ユカリ、チサトがいる。アリサもミホも…。
ミカの声は届かない。みんなは遠ざかっていく。
そっちにいっちゃダメ、そっちは…。
赤く染まった空間、転がる肉塊、
返り血を浴びているのは…。

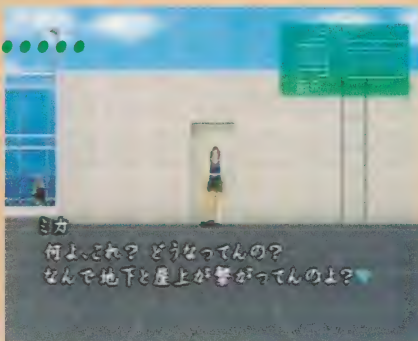
雛代高校

いつもと変わらず、今日も学校では何もなく、平凡に過ぎていくはずだった。ミカはいつになく眠そうだ。

先生を殴ってしまい、謹慎一週間の処分になったミホ。それを聞いたミカは「アタシも誰か殴って退場しようかな」

欠伸をひとつ、眠たそうなミカ。あまりに寝付けない為に始めたロープレにハマってしまい、徹夜したらしい。そんな平和で平凡な一日。そこにミホがやって来る。テンションの低さを指摘すると、なんと気にいらない先生を殴り、一週間の謹慎をくらったらしい。ひとしきり、先生の悪口で盛り上がるミカたち。すると…。

廊下を子供が……

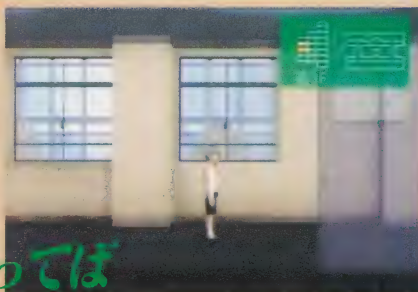
話の途中、ふと廊下を見ると、あの子供が走り抜けた。鍵を届けてくれた子供。部室でも会ったような気がする。なぜあの子供が、こんな時間に学校の廊下を走ってるの？

不思議に思ったミカは、廊下に出る。しかし、あの子の姿はどこにも無い。そのまま探していると…いつの間にか、新校舎の地下1階にいた。あれ…？　急いで階段を上がる。そこは、新校舎の屋上だった…。

階段や通路のつながりがメチャクチャになっている。地下からいきなり屋上へ上がってしまい、ミカは序々に混乱していく。

脱出ポイント

●屋上のドアや階段は空間の歪みによって、ランダムにつながっている。その為、ループに陥ってしまうが、屋上に来たびにミカのセリフが変化するので、これを目安にする。最初はギャグすら言うミカだが、何度も屋上に出るうちに、喋る元気すら無くしてしまう。何も言わなくなったら、屋上からどこでもいいから階段に向かおう。その時に新館の2階に移動できたらループから脱出している証拠で、イベントが進行していく。

「ひょっとしてミカねえちゃん、ボクの事探しているのかな？クックックッ…」

どこからか、ミトラの声が響いてくる。ますますわからなくなってくる。何度も屋上に上がり、いい加減嫌気がさしてきた頃、廊下の中央にミトラがいた。追いかけていくと、ミトラはミカのクラス、2年3組に駆けこんだ。ミカも後を追い、教室に入る。

やっと発見。まるで遊ばれているようだ。そのまま追いかけると、ミカの教室に入った。そういえば、人気が無くなっている…。

……ボクはこっちだってば

教室に入ると――そこは森だった。うっすらとモヤのかかった暗い森。なぜ森に？という思いよりも、ミカはこの森に来たことのあるような気がしてならなかった。しかし、思い出せない。

スッ、とモヤが薄くなる。見ると、いつの間にか森の中に、ミホとカヅキ、ユカリ、チサト、アリサまでが立っていた。みんな、楽しそうに何事かを話し、笑いあっている。だが、誰もミカに気づく様子が無い。そこに、みんなのところに行こうとするが、体が動かない。まるで、金縛りにあっているようだ。気ばかり焦る。同時に、なぜ誰も自分に気がついてくれないのか不思議に、そして寂しく思うミカ。ここにいるのに、すぐ近くなのに、誰も私の声が聞こえないの？先輩、私の声が聞こえないの？

どうする事も出来ないミカ。すると、みんなが少しづつ遠ざかり始めた。なんで私だけ置いて行くの？

次の瞬間、ミカは森の奥に何かを感じた。本能的なものか、そこに行ってはならないと察知したのだ。だがみんなはその方向にどんどん進んで行く。遠ざかっていく。駄目、そっちに行っちゃ駄目…私は、そっちには行きたくない…。だって、そっちは…。

みんなの姿が小さくなり、消えていった。胸騒ぎ。不安と恐怖。森の奥の深い闇は、そのままミカの心を投影した。

目の前の景色が、また変わる。

ミンナ　オイテカナイデ
ソッチニイッチャ　ダメ
ソッチニハ　イキタクナイ
ソッチハ……

ナニ、コレ……ナンナノ……

森の奥の闇に吸い込まれていったユカリ、チサト、アリサ、ミホ、カヅキ…。みんなが、血まみれになって倒れている。死んでいる。壁も、机も、窓も、真っ赤に染まっている。

手に何か握っている。冷たく光る、ナイフ…。なぜわたしがこんなものを持ってるの？　友達、みんな友達なのに、私が殺すはずがない。きっと間違い、何かの間違い…。私を一人にしないで…。

序々に目の前に現われる光景は、一度見ただけでは理解が出来なかった。

ユカリ、チサト、アリサ、カヅキ、ミホ…。動いていない。

魂の抜けた肉体。抜けた…？

なにもかも、赤く素染まっている。壁、窓、机が、みんなの、友達の血で、真っ赤に染まっている。

手に、何か持っている。私の手？　冷たい、光る、恐いもの…。

みんな、死んでる。殺されてる。殺したのは誰？私が殺した？　…一人だけ残されて…一人だけ生き残って。嫌だった、嫌いだったの？

渦巻く思考の隙間に、ミトラの声が染み込んでくる。

「あーあ、ヤッちゃった。しーらない…でもスゴすぎるよね。ってゆーか、フツーここまでやらないって。ヒドイなー、みんなオトモダチだったのに…クックックッ」

トモダチ……死んでる……殺した……私が、私の意思で!?

ウソ……

アタシジャナイ
コンナノアタシジャナイ

「自分のやったことはちゃーんと認めた方がいいんじゃないの？」ミトラの無情な声に、ミカは戦慄する。これは、私が望んでいた事。私が望んでやった事…？

　ミカの全身は返り血を浴びている。血まみれのまま立ち尽くしている。迫りくる恐怖、罪の意識、どうしようもない袋小路…。
　必死に否定しようとしても、血まみれの姿が事実を証明している。手に握られたナイフが物語っている。目の前だ倒れている、友人たちだった肉塊が逃れられない事実だ。
「コンナノアタシジャナイ…アタシジャナイッ」
　再び、ミトラの声が聞こえてくる。
「あーあ、まだシラきってるよ」
　冷酷な声。

「人間なんてさー簡単に死んじゃうよね。
こんなのたいした問題じゃないよ。
もっと自分に対してスナオになりなよ。
ありのままの君でいていいんだよ。
そのほうが気が楽になれるよ。
別にムリしなくてもいいよ。
自分だって
本当はコレで良かったって
思ってるくせに」
　再び、死体の山がミカの目に飛び込んできた。
　絶叫とともに、意識が弾ける。

　ミカは無人の教室にいた。静寂が続いた後、チャイムが鳴り響く。あれが私の望んでいる事？　嘘…嘘だ！　否定すればするほど自分自身にさえ疑いを持ってしまう。
　憔悴し一人でフラフラと帰路につくミカ。いきなり、前方から救急車が接近してくる。赤いサイレンが目の前を通り過ぎ、遠ざかっていく。さっきのイメージと同じだ。
　…また、誰かが死んだのだろうか。そして、殺したのは自分なのだろうか…。
　ミカは、わからなくなりかけていた。

白昼夢なのか、深層心理なのか…信頼して、助け合う友人たちを殺してしまうビジョンは、ミカに大きなショックを与えた。ミトラは、きっとどこかでほくそえんでいるだろう。

キャラクターファイル ＃5

FILE 5

冬葉ルミ

クール、冷淡。表面に感情を出さず、群れをなす事を嫌い、常に周囲との差別化をはかっている。誰に対しても心を開こうとしない。

リョウとは幼馴染みであり、スミオの妹であるルミは、リョウとキョウコ、そしてスミオという複雑な人間関係の中で育ち、いつしかリョウのようにアウトサイダーとなる。だが、リョウとキョウコの関係よりも、さらに深い関係をスミオと持っており、スミオとキョウコのいない今となっては、その関係は精神的外傷として残っているだろう。ロック、酒、タバコ、アルコール、男と、その傷を癒してくれそうなものは一通り体験しており、その過程でリョウと付き合っていた事もあった。露出度の高いボディコンシャスな服を好んで着ているが、誰にも見せない本心は、スミオへの素直な感情をずっと抱き続けるという古風で日本的な面を持つ。

RUMI TOWBA

～Rumi's Words～

●リョウに対して、リョウとキョウコの関係の本質を問う。「抱いてる時、あたしの向こうに誰を見てた？　リョウの視線は、あたしを突き抜けてたよ。まるで、切り裂かれているようだった。誰もいない、冷たい路地みたいに…兄さんも一緒だと思う。キョウコの視界には兄さんはいない。いるのは…」●さらに、リョウの弱さを指摘する。「…リョウ、あんたって結局、何一つ答えることさえできない。逃避してるのはあんただよ。日本なんて土地は関係ないよ。どこの国だって、真心は残るんだよ…心を消費して、結果、何も残らないよ。少しはさ、情も残ってるからそう思ったけど…あんたは弱者だよ。弱さを武器にしている…多分、わからないだろうけど、キョウコにとっては悲劇なのよ…それじゃね」●遅れてきたミカに対して。「別に…平気よ。あんたの遅刻、今に始まったことじゃないし…お陰でいいコンピレーション見つかったから…感謝するわ」●ミカに向かって、友達という存在の概念を否定する。「…あのさぁ、甘いよ、ミカは。じゃあ、友達ってなによ？　あんたの友達の基準って何？　人に期待しすぎだよ、あんたは。なんか偽善的な付き合いだよね、その関係ってさ…傷の舐め合いじゃん、所詮。友情ゴッコだったらさ、一人でやってくれない？　あたしの事心配して誘ってくれたんだろうけどさ、それほど人に期待してないから」●ミカを救出に行くリョウに対して。「…リョウ！　…ミカを助けてあげてね」

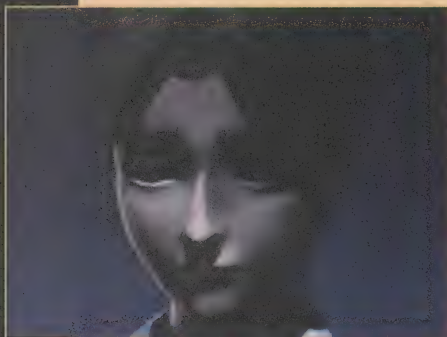
ミカの住む「ヒラミッド御殿」の周囲にある、「城壁」と呼ばれる団地——ここで最近、飛び降り自殺が多発していると言う。ミカの好奇心は頭をもたげ、この事件を調査しようとユカリを誘うが、取り合ってもらえない。仕方なくアリサ、チサトと共に団地に向かうが、何故かミカ以外は誰も来ておらず、単独で調査を始めることに。ところが、突然中学生に囲まれ、警告を受ける。ミカの直感が「何かある…」と察知する。一方、遅れてきたアリサは、団地の前で泣いている少女を発見。わけを聞くと、この団地にただならぬ事態が起ころうとしているらしい。ミカと合流すると、ミカもまた、事件のキーパーソンの存在を突き止めていた。そして、口には出さないながらも、ミカのことが心配なユカリは、チサトと共に団地へ。そしてそこに現われる、ヤヨイ。

一体この団地で、何が起ころうとしているのか。団地を見上げると、少年少女の渦巻く情念に包まれていた…。

FUYOU

ピラミッド御殿 城壁

団地の屋上に立っている少年。何かに見入られたかのように、その場所から動く事ができないようだ。すぐ目の前には、死が忍び寄っている。

別棟の屋上に集まった少年少女。怯えているのか、無関心なのか…それとも諦めているのか。今から起こる現実の一部始終に立ち合っている。

恐怖が頂点に達した時、少年は漆黒の空間に足を進めた。絶叫と共に、宙に舞う少年。月の光が少年の背中を後押ししたのだろうか…。

ミカの住む「ピラミッド御殿」と呼ばれるマンションを、取り囲むようにして建つ団地。それらは「城壁」と呼ばれている。

満月の夜。城壁の屋上に立つ少年。その顔は、恐怖と絶望に歪んでいる。別の棟の屋上に集まる少年や少女は、目の前で行われようとしている残酷な儀式をうつろな表情で見つめていた。そして、どこからともなく呪文のような子供たちの声が聞こえてくる…。

月が、妖しく輝いた。その光を隠すかのように、少年のシルエットが重なる。宙に舞う少年。刻が止まった──鈍い音。

屋上から、少年少女の姿が消えていた。全てを見ていた月の輝きが、少し赤みを帯びたようだった。静寂が、城壁を包み込む。

雛代高校校舎前

四人が始めて顔を合わす。天真爛漫にタメ口をきくアリサに、ユカリはカッカするが、チサトとミカにになだめられる。

よろしくね、ユカリ(アリサ)

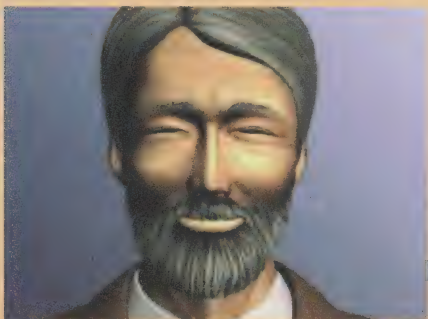
校舎前。帰宅しようとしているユカリに駆け寄ってきたミカ。ピラミッド御殿の城壁と呼ばれる団地で、昨日3回目の飛び降り自殺があったと言う。軽率な発言はやめろ、と言うユカリ。だが、ミカの好奇心はすっかり頭をもたげている。甘えるように、団地の中学生の行動を探ろうと言うミカだが、ユカリは全く乗ってこない。

そこに通りかかるユカリとアリサ。意外な組み合わせだが、二人は弓道部の先輩後輩の関係である。

呼び捨て…なんなの、このガキ(ユカリ)

アリサは、初対面のユカリに向かって、いきなりタメ口の上に呼び捨てで語りかける。カッカするユカリをなだめるチサトとミカ。アリサにかかっては、さすがのユカリもかなわない。
「用が無いなら帰るよ、あたし」ユカリはチサトを誘い、帰ろうとする。機嫌の悪いユカリを気づかうミカに、チサトはそっと耳打ち。納得するミカ。アリサも会話に入りたがっている。結局、そのままみんなで帰ろうとするが、ミカがＰＨＳを忘れた事に気がつき、アリサを誘って校舎内へ取りに戻ることに。一体、女子高生の神器をどこに忘れたのか…。

校舎内

校舎内を移動していると、校長に出くわす。敬語を使わずに話しかけるアリサに、ミカは焦るが、校長は気にしない。

笑顔が非常に優しく見える校長。アリサによると、雛代高校の生徒全員の名前と顔を覚えているという。

チサトを外に待たせたまま、教室に入る二人。だが、何故か机の中にＰＨＳは見当たらなかった。
「…頼みますよ～」とアリサ。突然ミカは、図書室で昼食を食べた時に忘れた事を思い出す。教室を出て、図書室に向かう二人は、校長に出くわす。
「遅くまで残って大変だね、ごくろうさん」

笑顔で優しく語りかける校長。アリサは校長にまで敬語を使わず話しかける。
「２－３の岸井ミカくんと１－６の鹿原アリサくんだったね…」

校長いわく、二人のことは担任からいい生徒だと聞いているという。喜ぶアリサに、ミカは「意味が違うよ…」とあきれ顔。
「生徒全員の名前と顔、覚えてるんだよ」

校長の評判をアリサに聞き、感心するミカ。どうやら二人だけではなく、生徒の受けはいいようだ。

再び図書室に急ぐ二人。果たしてミカの記憶通り、本当に図書室に忘れたのだろうか？　チサトも待たせているし、急がねばならない。

図書室

放課後の図書室は、人影もまばらで静かだ。ミカは、昼食をとった場所を調べるが、やはり無い。「違うところじゃないの？」というアリサに、ミカは少々不機嫌になり、周辺を探す。アリサはそこから離れて、図書室内をあちこち探し回る。

やがてアリサは、ある場所でミカのＰＨＳを発見する。「ミカ〜、あったよ！」と叫ぶアリサ。ミカが歩み寄る。だが、見つかったのは、ミカが置き忘れるはずのない場所だった。気になるミカ。「多分、誰かが拾ってくれて、それで、ここに置いてくれたんだよ〜」というアリサの説明にも、納得できない。しかし、チサトを待たせている為に、モヤモヤした気分のまま図書室を出る。「…誰かに弄ばれてたら嫌だなぁ…」

団地前 路上

ユカリに呆れられたものの、ミカの好奇心は収まらなかった。しかも、アリサとチサトも来るようだ。だが、待ち合わせ場所には誰もいない。

電話の相手は…？

なかなかやって来ないアリサとチサトに電話をかけようとするミカ。だが、もうひとつ選択肢がある。それは「リダイヤル」だ。図書室で見つけてから、どこにも電話はしていない。ひょっとして、誰かがこのＰＨＳを弄んでいたとしたら…。不安と興味が入り交じるなか、リダイヤルボタンを押す。コールの後に出た相手とは…。

ひょっとして、誰かが勝手にミカのＰＨＳを使っていたかもしれない。ミカの好奇心が刺激される。

団地の前にいるミカ。やはり、好奇心は押さえられない。ところが待ち合わせ場所である団地前の路上にはアリサはまだ来ておらず、チサトもいない。ＰＨＳで連絡するが、アリサはすでに出た後で、チサトの家は留守番電話になっている。どうしようかと考えていると一人の女の子が目の前を通り団地に入って行った。
「…こうなりゃ、ピンでやるか！」

待ちきれなかったミカは、単独行動を決意し、女の子の後を追いかける。だが、その姿はもう見当たらない。そして、団地のすぐ前まで来た時…。

ミカの目の前を、団地に向かって女の子が歩いていった。待ちきれないミカは、単独行動を決意する。

意外に広い図書室内。放課後のせいか人影は少ない。ＰＨＳはそれほど難しい場所にあるわけではないので、この中を探してみれば容易に見つけることはできると思うが、読書台周辺はすでにミカが探しているので、違う場所を探してみよう。

この棟だったんだ…

ヒロシ

「なに、このオンナ…おとなしく、プリクラでもやってろよ」「知らねぇよ、俺は。あんたに何するか責任もてないからよ」「…まだこんなところにいるのか？　それとも俺にうずくのか？」

ルカ

「ねぇ、メスガキは消えて…わたしたちのコミューンに入らないで」「…こういうオンナって許せない。迷惑なのよ、わたしたちにとって、そっちの存在そのものが…何もわかってない」

タケル

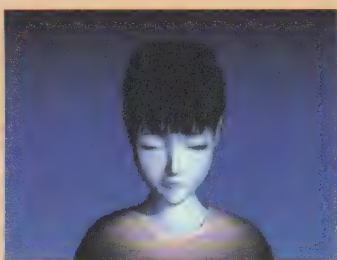
「これは忠告だ…よそにはわからないここのルールがある。他者が入り込むことはできない…お姉さん、わかった？」「団地の人間にしかわからないよ…窓の明りを見ればわかるよ」

突然現われた三人の中学生たちはミカに脅しとも忠告とも取れる難解な言葉を浴びせかける。いよいよミカは、団地に対する疑惑を深める。

ミカの足元のアスファルトに人を型取った白い線が引かれていた。「昨日の自殺…？　この棟だったんだ…」

思わず固まるミカの前に、突然現われる三人の中学生。彼等は大人びた口調で、ミカを攻撃する。ミカをけなし、侮辱し、脅すような口調を使って、ミカを団地から遠ざけようとする。どうやら、団地という自分たちのコミューンを、他人に侵害されたくないようだ。一度は引き下がるフリをするミカだが、三人がバラバラになった後、一人に話を聞く。だが、その内容もまた、何かを感じさせるものだった。「絶対に何かある！」確信したミカは、次の行動に入る決意をする。

待ち合わせに遅れてきたアリサは、ナナという少女に出会う。泣いているナナから話を聞き出すと、それは物騒な事実だった。とりあえずナナに自分の部屋に帰るように指示し、ミカを探す。早くしなくちゃ、大変な事に…。

泣いているナナ。友達のタクミが、昨晩ダイブをしたと言う。ナナの体を触ってきたタクミは嫌いだから悲しくはないが、今日はナナがダイブする番なのだと言う。一体なぜ、ダイブしなければならないのか…。

ようやく待ち合わせ場所にやって来たアリサだが、ミカの姿が見えない。チサトもいないので、二人に置き去りにされたかと不安がるアリサ。ふと見ると、泣いている女の子がいる。

「ねえどうしたの？　感動してるの？」

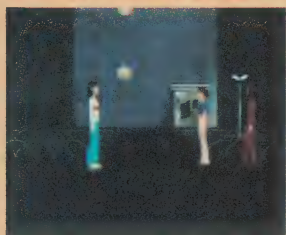
女の子はナナという名だった。話を聞くと、昨日友達のタクミが死んで、今日はナナがダイブする日だと言う。事態を察知したアリサは、ナナに部屋に戻り、鍵をかけて黙って隠れているように言う。あとで必ず助けに行くから、と。

アリサの指示に従うナナ。アリサは、ミカを探し始めた。

一方のミカは、リルという少女の存在に注目する。リルがキーパーソン…。アリサと合流し、お互いの事情を説明し合う二人。とりあえずは、ナナの安全の確保と、リルの探索が必要だ。二人は、団地に向かって歩きだした。

…ど、どうして

C棟の８０３号室。ナナの部屋にやって来た二人。アリサが声をかけるが、返事が無い。扉を開けると、そこにはナナはいなかった。「…ナナちゃん、いないよ〜。どうして開けちゃったの？」外に出るとタクミがいた。ミカは、ナナを助けたいができない、と言うタクミに意見する。

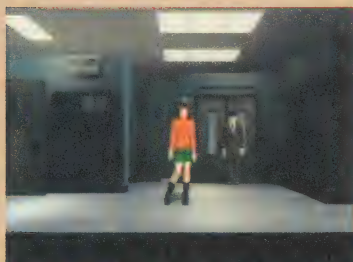
団地前路上・夜

すっかり暗くなった団地前。チサトとユカリが歩いている。口や態度ではともかく、ユカリはやはりミカが気になるようだ。気がつくと、前方に誰かが立っていた。チサト、沈黙…。

「お久しぶり、姉さん…」「…何しに来たの」姉妹の対面に異質な緊張感が漂っている。二人の関係とは、一体どういうものなのだろうか。

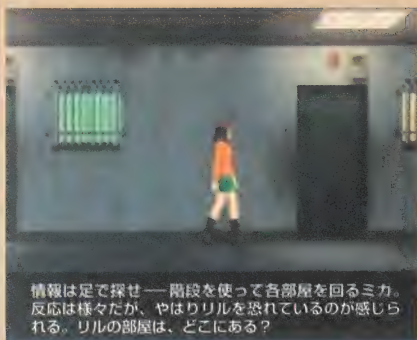
ミカが気になり、ユカリもチサトと共に団地にやって来た。チサトに仲の良さを指摘され、動揺するユカリ。すると突然、チサトが立ち止まる。さの視線の先に立っているのは…。

[illegible]のチサト、ヤヨイに対し、毅然たる態度を取っている。だがヤヨイは言葉尻を捕えて、それに対抗する。

チサトとヤヨイの会話。それはユカリには理解できない内容だった。それぞれの役回り、弱い者の存在、偽善、そして今もこっちを見ているという「彼」…。さらにユカリを罵倒するヤヨイ。その体から炎のようなものがまき上がる。「ダメッ！ユカリちゃん!!」チサトも対抗しオーラを出す。しかし、すでに遅く、ユカリの姿は消えていた。「…許さないよ、ヤヨイ!!」

A棟探索

A棟入り口。エレベーターの横にアラマタが立っている。手帳に記録しておくのがいいだろう。

闇に浮かぶ団地の、いくつかの窓に明りがついている。人がいると思われる部屋へ行き、情報収集するのだ。

リルを探す為、ミカはタケルに聞いた通り、リルをよく見かけるというA棟にやって来た。下から見上げると、窓の明りが見える。
「明りがついている部屋…ここに人がいるのか」チェックした後、団地内へ。エレベーターで上がろうとすると、故障中の札が下がり、動いていない。仕方なく、階段を上っていく。ベルを鳴らし、開けられたドアのすき間から見える、闇に浮かぶ目。どの部屋でも、何かを恐れているようで、言葉少なく閉められてしまう。間違いなく、彼等はリルを恐れている。これほどまでに怯えさせる存在とは…。

情報は足で探せ──階段を使って各部屋を回るミカ。反応は様々だが、やはりリルを恐れているのが感じられる。リルの部屋は、どこにある？

どの階も同じ造りの団地の構造は、学校の作りにも通じる無機質なものだ。一階一階聞き込みをしていくミカだが、なかなかいい情報が得られない。だが、少しづつ絞られてきて、リルの部屋に近づいているのは間違いないようだ。そこで一計を案じたミカはある部屋の少年にこう言った。「となりのコから聞いたんだけど、リルが呼んでるって…」慌てて部屋を出る少年の後をつけるミカ。少年は故障中のはずのエレベーターに乗り込んだ。「10階…で止まった。よしっ!! だいぶ絞られてきた」

ついに有力な手がかりを得たミカ。残すところ、あと数部屋だけだ。だが、その時、全く違った情報を得る事になる。迷うミカ。

それじゃ、リルの部屋っていうのは…。今までの情報では思い当たらなかった部屋へ向かうミカ。そこに、リルはいるのか？

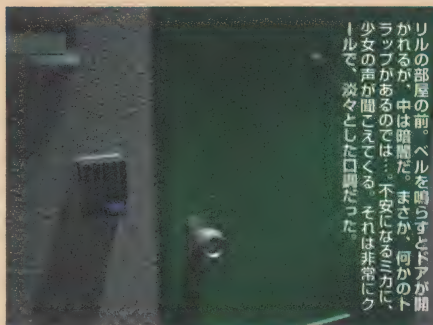
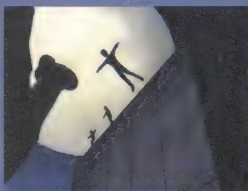
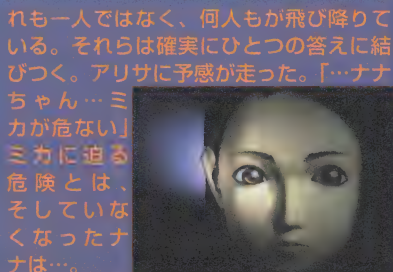
〜リルについての証言〜

「…リルとは無関係、わたしは何もしてないからタクミの事も知らない…会ったのは一度だけ…エレベーターにたまたま乗ってその時、一緒になって、怖い、怖かった…それしか言えない」

「なんか夜景が一番きれいに見えるとかなんとか角部屋だから、窓が多くて視界がいいって…それしか知りませんよ。いいですか？ 夕飯の支度してるんで」

「リルはなかなか姿を見せません。奥に引っ込んでいるんです。団地の一番奥…」

リルの部屋

リルがいると思われる部屋の前にやって来たミカ。意を決して、ベルを押す。少し間があった後、静かにドアが開いた。だが、中は暗闇で、人の気配が無い。
「…リルちゃん？」「どうぞ、入って……何もしないよ。遠慮しないで、どうぞ」
一瞬躊躇するが、中に入るミカ。少しづつ、リルの顔が見えてくる。

リルの部屋の前。ベルを鳴らすとドアが開かれるが、中は暗闇だ。まさか、何かのトラップがあるのでは…。不安になるミカに、少女の声が聞こえてくる。それは非常にクールで、淡々とした口調だった。

一方、アリサはこの団地に何かを感じていた。言いようの無い不快感、漠然とした恐怖、悲しみ、絶望…。「…動いてる」多くの少年や少女の悲鳴が聞こえてくる。そして、屋上からダイブをしているビジョン。それも一人ではなく、何人もが飛び降りている。それらは確実にひとつの答えに結びつく。アリサに予感が走った。「…ナナちゃん…ミカが危ない」ミカに迫る危険とは、そしていなくなったナナは…。

A棟屋上

気がつくとユカリは屋上にいた。そしてそのそばに女の子がいる。ナナだ。

「…あんた、そこで何してるの」

「近寄らないで…みんなが見ている！」

渦巻く殺気が無みのように押し寄せてくる。飛び降りようとするナナを制止し、説得するユカリ。だが、ナナはなかなか聞き入れない

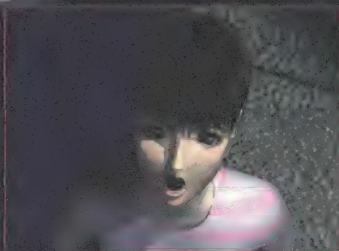
「ずっと見られてるの…ナナの番だから
これが役割だから…もう逃げられない」

「いつまでバカな事いってるの！」

叱責し、必死に説得し続けるユカリに、ナナはようやく理解してくれる。

だが、やはり逆らう事はできなかった。いや、リルの思い通りになるのではなく、ナナは自らの意思で人柱になる決意をした。そして、女の子は宙に舞った…。

ヤヨイに飛ばされたユカリは、A棟の屋上にいた。そのそばには、今にも飛び降りそうな女の子、ナナが立っていた。ユカリは必死に制止する。

怯えて、リルの思い通りになろうとしているナナ。ユカリは叱責し、一時はナナも留まるが…。

あえて自分の死によって──人柱になる道を選んだナナ。ユカリに礼を言うと、ナナは飛んだ。

リルの部屋

わたしはただのシンボルに過ぎない
そう、シンボル…
ここの団地はほとんどが共稼ぎの家…
小さいコは家でテレビを見ているか
育児所に預けられ
小学生はどこかに固まって
ゲームをしている
高校生は遅く
まで帰らない
この時間、
生活が遮断
された時間に
ここにいるのは
わたしたちの
世代だけ考えてみて…
あなたたちの世代も
ここに住んでいるわ
でも、今の時間は誰一人いない
深夜の団地はあなたたちのモノなの…

朝はそれぞれの時間…
昼間は主婦と子供たちの時間…
夜はあなたたちの時間…
わたしたちに与えられた時間は
月が見え始める隙間の時間
わたしたちの世代は改革するの
あなたたちの様な
世代を踏襲しない
ように新しい
時間と空間を
取り戻すの
みんな、あなたたちの
様になりたくない
ここの、団地の歴史を
塗り変えるようにと
立ち上がったの
その反抗が自殺なのよ
だからわたしは何もしてない…
信じてもらえる？

A棟

タケルによって助けられたナナ。ミカの成長ぶりに驚くユカリは、タケルと共にナナをC棟まで運んでいく。

「どうしてよ…どうしてそんなに簡単に死ねるの」

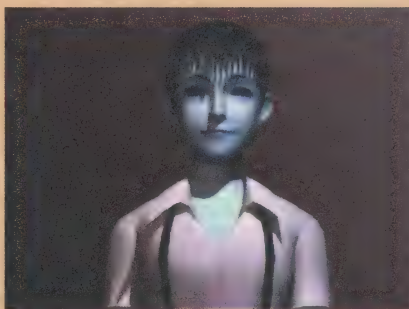
ナナを救う事ができなかった悲しみにくれるユカリ。そのまま階下に降りて行くと、一人の少年が立っていた。その腕の中には、ナナがいる。

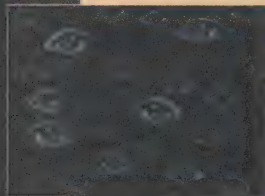
「…あなたが助けてくれたの？」「俺も自分でなにかしようって…さっきミカって人に教えられて」

リルの部屋

眠ってしまったミカ。リルはジッとミカを見ている。

向かい合っているリルとミカ。だが、リルのすすめたお茶を飲んだミカは、テーブルに突っ伏して眠っている。

シンボルからサブスタンスになる決意をしたリルは、ミカに一言礼を言い、部屋を出た。「…ありがとう、ミカさん」

「こういうきっかけをつくってくれないと、わたしたちは何もできない…」リルはある決意をし、ミカと決別する。部屋のドアが、ゆっくりと閉められた。

団地前

…ダメだよ、

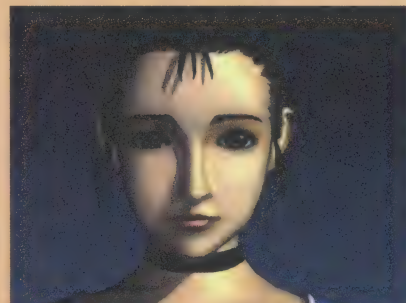
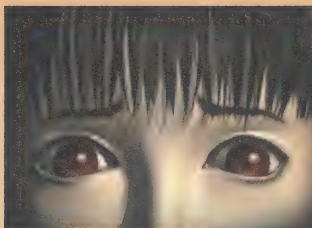
渦巻く情念の矛先がユカリに向けられる。凄まじいばかりの殺気。

リルを部屋に連れていったユカリがC棟から出てくると、そこには凄まじい殺気がますます膨れ上っていた。渦巻く少年少女の悲しみの情念。その矛先がユカリに向けられた時、アリサが現われた。アリサの体から、オーラが立ち上る…。

情念に向かってオーラを立ち上らせ、対抗するアリサ。友達であるユカリのピンチを救う為に「力」を使う。情念は、たちまちの内にかき消えた。

A棟屋上

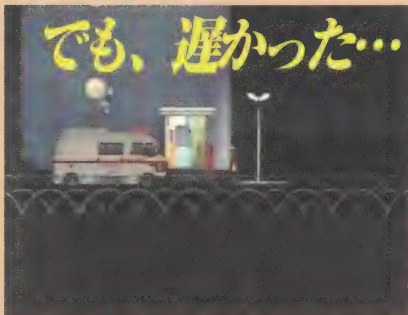
リルは自らの死によって終結させようとする。

屋上に立つリルとチサト。リルは、自らがダイブする事で全てを終わらそうとしている。だが、それもまた「死」に対する認識不足からくる、間違った解決方法に過ぎない。説得するチサトが死を語り始めた時、別の何かが顔に浮かんだ…。

死の本質と事実を語るチサトの顔に、何かが重なる。それは人間ではない、何か別のもの…。

「あなた何者なの？　あの子供と一緒…」リルの発言に、チサトの謎が一層深まる。あの子供、とは…。

怯えるリル。しかし、すぐに安堵の表情となる。「…天使なんだね、きっと…わたしの事、迎えにきたんだ…ありがとう」「違うよ…リルちゃん、しっかり現実を見て！」チサトの言葉は、もうリルには届かなかった。そして笑顔のまま、リルは落ちていった。

生きていてよかった…

A棟屋上

あまりに悲しい最期。チサトは、その怒りをもう止められなかった。冷静な口調から序々に怒りの口調に。そしてまた、ヤヨイはそれを煽っているかのようだった。
「覚悟しなさい…」
チサトの影が光と共に物質化した。ヤヨイの影もまた、光をはなち…。

まるで楽しんでいるかのようなヤヨイの行動。チサトの感情が爆発する。

ヤヨイとチサト。この姉妹は同じ「力」を持っているようだ。しかし、それぞれ違う方向、違う手段に使っている。

わたしを消しても“彼”は抑えられないよ…

覚悟しなさい…

団地の一室

今日も行き場の無い少年たちは、団地の一室に集まり、無表情のままゲームに興じている。自分たちの居場所を確保するよりも、刹那的な逃避をする弱き存在であり続ける限り、第二、第三のリルは作られる。そして、同じ事が繰り返される…。

ゲームをする少年たち。照明はモニターの明りのみ。

果たしてモニターを見ているのだろうか。プレイヤーでさえ、焦点があっていない。

そんな冷めた子供たちの中、薄い笑みを見せている少年が一人、背後から忍び寄る。

ただ一人“死のゲーム”を楽しむ者…

リルが言っていた。「わたしたちに与えられた時間は、月が見え始める隙間の時間…」小学生は、「逢魔が時」以外には時間を与えられず、団地の空間を使う事を認められていない。唯一彼等ができるのは、どこかの部屋に集まり、ゲームという接点によってコミューンを作る事だけ。ただ毎日、それを繰り返すしかできず、ゲーム・コミューンがなければ存在理由すら無くなってしまう…。

そこにつけ込むのはたやすい事であろう。ナナは自分の意思で、リルへの反抗としてダイブし、リルは自殺を終わらせるためにダイブした。これで全てが終わるはずだった。

暗い部屋でゲームをする小学生たち。その背後から忍び寄るのは「死」である。そして、数々の情念は消える事ができない。それを楽しんでいるのは…。

その背後から確実に「彼」はやって来る。「死」という虚無の代理人として…。ほくそ笑む少年。その存在はいつでも隣り合せのものかもしれない。果たして白髪の少年の正体は…そして、その目的は何なのだろうか。ミカたちに及ぼす影響は…。

キャラクターファイル #6

逸島ヤヨイ

善と悪、表裏一体。状況や相手によってその顔は変わる。外見はおとなしそうだが姉のチサトとは似ても似つかない存在。

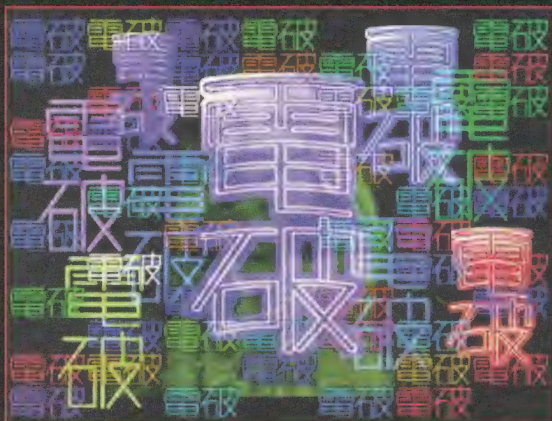
姉であるチサトは、ヤヨイの全てを拒んでいる。ヤヨイは、それぞれの個に対して、全く違ったアプローチをしてくる。リョウにとってはあたかも恋人・母親のように、ミカにとっては、その状況をかき回す存在であり、チサトにいたっては敵という感覚でしかないのだろう。スミオと関係のあった女性の中の一人である事には間違い無いが、その中でもスミオに対する愛情は異常なまでに深い。スミオの死によって、以降は白髪の少年・ミトラの使い魔のように動く。チサトがそうであるように、ヤヨイもまた特殊な霊力を持っている。そして狂暴になるとあらゆる手段を使って相手の精神を破壊するほどの残忍さを持つ。おそらく、人間ではない存在なのかもしれない。

～Yayoi's　Words～

●スミオと共に、リョウに残酷な試練を与える。「リョウ、すべてを許せる？　わたしの醜い塊を見ても…それでも、あなたはわたしを許せる？…あなたの試練よ…試さなくてはいけない…スミオとあなたの摩擦…それがわたしそのものなのよ…今のわたしはスミオの所有物…ねぇ、リョウ…スミオよりも、あなたを選択する…スミオの為に、あなたを選択するから」●スミオの死体に向かって。「安心して、わたしが最後まで見ているから。あなたが魂の亡骸になるまで、黒焦げの死体になって、そしてわたしはキスをするの…素敵な最後でしょ？　わたしにはリョウがいるから…」●ミカと出会って、言葉につまるミカに向かって。「…ヘンなの、間が持たないの？　今の人たちってみんなそうよね。他人との接点を探して、懸命になっているわ。…ミカさんなんて代表的ね。そういう人たちって、傍で見ているとなんか滑稽で…退屈しなくていいわ」●団地前で、ユカリとチサトに向かって。「この人がユカリさん…噂には聞いていたけど、ほんと、単純な人ね。…笑わせないで、あなた程度に若いコ扱いされたくないわ。バカな姉が選ぶ人だけあって、意味のない存在だこと…ユカリさん、あなた邪魔よ！」●ミカの救出に向かおうとするリョウに向かって。「どうして戻ってきたの？　あなたはここに来てはいけないのに…なんで？　もう誰も止められないから、だからお願い、この先には行かないで。リョウはわたしが守ってあげるから…ねっ？…リョウ、わたし…リョウ…死なないでね…本当に…」

度重なる現象によるストレス解消に、ユカリをクラブに誘うミカ。仕方なく付き合うユカリだが、思ったよりも楽しむ事ができた。だが、クラブを出た時からミカは耳鳴りに悩まされ続ける。ノイズのような音に加え、誰かの言葉か罵声に聞こえる。まるでチューニングをしているラジオのように、時折飛び込んでくる声、のようなもの。そして、授業中の居眠りから覚めると、そこはクラブだった。しかもユカリとではなく、ミホと来ているようだ。再び自宅へ戻るミカ。耳鳴りはやまない。目を閉じる…目が覚めると、そこは学校だった。

夢、現実、夢。どれが本当だかわからない状態の中、ミトラが現われる。ミカのチューニングは、少しづつ調整されている。

DENPOW

面白さは保証するというクラブイベントへの誘い。流行りモノに弱いミカらしい誘いだ。最初は気乗りのしなかったユカリだが…。

ユカリにかかってきたミカからの電話。それは、最近続いているディープな出来事で溜まったストレスを発散させる為、クラブに行こうという誘いだった。「また、あんたはすぐそうやって流行りモンに飛びついて…」と呆れるユカリだが、ミカなりに気を使ってくれているのがわかる。だが、普段は立ち寄らない場所だけに、「つまんなかったら途中で帰る」という条件付きで約束を交す。

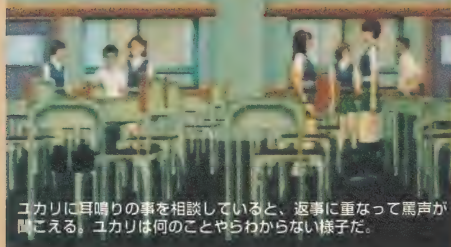
クラブ「LOST HIGHWAY」

最初は踊るのを遠慮していたユカリだが、ミカに誘われていつしか踊り出す。クラブ自体も思ったより楽しめた様子で、ミカもとりあえず満足する。

賑わうクラブの中に、ミカとユカリの姿があった。「踊る」という事に対して抵抗があるというユカリに、クラブでの楽しみ方を講釈するミカ。もちろんファッション先行のミカのことなので、本質を語っているとはとても思えないのだが。ドリンクを飲み、トイレに行くユカリを見てミカは心配する。「どうもここは先輩には苦手な場所なのでは…」戻ってきたユカリと共に、ダンスフロアに移動、「そろそろ踊りません？」と誘う。最初こそ遠慮していたユカリだが、いつしかミカとビートに合わせて踊り出した。しばらく踊ると、ユカリはドリンクを買いに行く。フロアに残ったミカは、疲れからか、座ったまま眠り出してしまう。

ハッと気がついたミカは、慌ててユカリの元へ。そのままクラブを出る二人。思ったより楽しんでいたユカリに満足するミカだが…。

クラブの帰りからずっと耳鳴りが続いている。帰宅しベッドに横たわり、寝ようと思ってもノイズが渦巻き眠れない。音は段々大きくなっていく。

雛代高校

ユカリに耳鳴りの事を相談していると、返事に重なって罵声が聞こえる。ユカリは何のことやらわからない様子だ。

教室に戻り、ミホと話している途中、またも罵声が重なる。もちろんミホが言ったわけではない…。

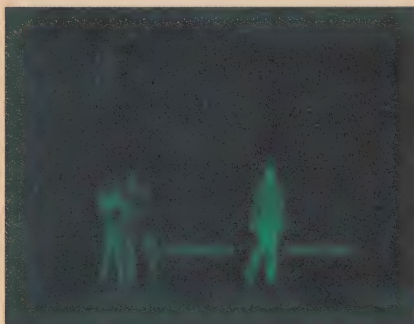
月曜になってもミカの耳鳴りはやまなかった。廊下でその事をユカリに話すが、ユカリは何とも無いようなのだが…。「治るまで気長に待つ事だね」と気づかうユカリ。だが、同時に「あんな音楽聞いてるからだよ、バーカ」という声が。不思議に思いながら教室に戻ると、ミホが話しかけてきた。しばらくクラブの話題で盛り上がる二人。再びミカは耳鳴りの事を話すが、返事をするミホの声に重なって、またも罵詈雑言が聞こえる。「ミホ、おめ一今なんつった？」と凄むミカだが、ミホは取り合わない。さらに文句を言うミカだが、その時チャイムが鳴り、授業が始まる。

腑に落ちないまま、一時限目の授業が始まる。先生の声よりも、耳鳴りが響いている。まったく授業に集中できないミカ。突然、聞き取る事のできないほど小さな声が聞こえてくる。ミホ？…のはずもない。ミカはただひたすら授業が終わるのを待つ。

休み時間、ミホに体育教師と保健婦の密会のウワサを聞き、その現場を押さえようと教室を出る。5分間の休み時間で校舎内をあちこちと歩き回る。だが、その間にもミカの頭の中には様々な声が飛び込んでくる…。

霜北の街で詩集を売っているというチサト。真実を確かめに行ったミカだが、チサトが何を言っているのかわからない。

再び授業。耳鳴りはまだやまない。

ミホがチサトの噂をする。なんでもチサトが、霜北の路上で詩集を売っていたというのだ。ミカはチサトの元へ事実を聞きに行く。が、チサトは普通の状態ではなかった。わけがわからないまま教室に戻り、次の授業。目を閉じ、眠りに落ちる。

クラブにはユカリと来ていたはずなのに、何故か一緒にいるのはミホ。リアルな夢だったのか？　別れ際にミカは、ミホが制服姿だったのに気がつく。…何故制服で？　混乱する思考に追い打ちをかけるように耳鳴りが脳内を駆けめぐる。

眠っていたミカが目を覚ますと──そこはクラブの中だった。「あれっ!?今、授業中じゃなかったっけ…」混乱するミカ。だが、ユカリとクラブに来ていた事を思い出し、急いでユカリが待っているだろうバーフロアに向かう。しかし、そこでミカを待っていたのはミホだった。

「長谷川先輩はこういうとこが苦手だから、結局いつものようにあたしが来ることになったんじゃん」

そうだっけ…？　先輩と来ていたはずなのに…授業中じゃなかったっけ…まあいいや。曖昧な納得をしたミカはミホと二人で外に出る。そして路上で別れたのだが、そこで始めてミホが制服だった事に気がつく。

帰宅途中。耳鳴りがやまない。「これ、前にもなかったっけ…？」部屋に戻り、ベッドに横になっても寝つけないミカ。目を閉じる。耳鳴りは続いている。

夢なのか、現実なのか区別がつかなくなっている。クラブには先輩と行ったはずなのに…今、授業中じゃなかったっけ…。耳鳴りはずっと続いたままだ。

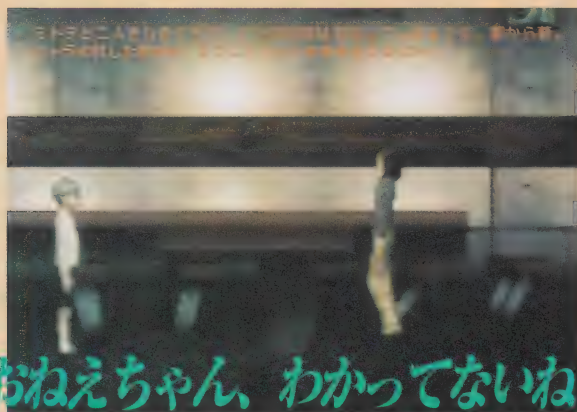
気がつくと、授業中だった。…夢…リアルな夢？　耳鳴りはやまず、頭痛がしてきたミカは、授業が終わるのを待って保健室へ向かう。が、歩くたびに耳鳴りは酷くなってくる。よろめきながらも保健室へ向かうが、再びどこからか声が聞こえてきた。
「殺すぞ…」
もちろん、周りには誰もいない。やっとの思いで保健室へ辿りつく。気づかう保健婦。しかし、ミカの口からはわけのわからない言葉しか出てこない。
「どうしたの？　岸井さん、落ち着いて！」
耳鳴りが高まり、限界に達した。ミカの意識はそこで途切れ、闇の中に保健婦の呼びかけすら消えていった。

耳鳴りはやまず、頭痛までしてくる。保健室に行くが、ミカの口からは意味不明の言葉しか出てこない。そう、チサトがそうだったように…。

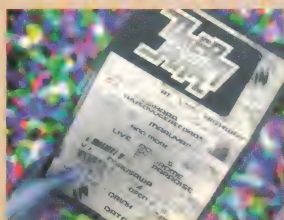
目が覚めると、ミカはクラブの中でしゃがみ込んでいた。また夢だったの…？　周りには誰もいないし、曲もかかっていない。そして、誰とここに来たのかさえもわからない…。立ち上がり、フロアを移動する。

誰もいないクラブで目を覚ましたミカ。どれが夢で、どれが現実だかわからなくなっている。

おねえちゃん、わかってないね

バーフロアに行くと、ミトラが待っていた。だが、ミカの記憶ははっきりせず、おぼろげにしかミトラを覚えていない様子だ。
「フフ、ちょっとイタズラが過ぎたかなぁ？」
どうやら今までのことはミトラの仕業らしい。その事が理解できないミカは、大人をからかった罰だ、と手を上げる。瞬間、ミトラの表情が変わった。
「わかってないね」

ミカ自室～雛代高校

長い夢から目覚めたミカ。だがその内容は一切思い出せない。頭痛がするまま、急いで学校へ向かう。

目が覚める。自宅のベッドの上。ミカは今まで見ていた悪夢を思い出せない。
学校に行くと、ミホが話しかけてきた。手には「LOST　HIGHWAY」のチラシを持っている。
また、悪夢が蘇る。

キャラクターファイル #7

華山リョウ

刹那・退廃・虚無…多くの若いアウトサイダーの象徴。孤高を謳うも、枯れた心を満たす存在に飢えている。

高校一年生の時からリョウのアウトサイダー人生は始まった。学校をやめ、バイクの修理工場で働く。友人もおらず、唯一心を許せる存在が姉のキョウコだった。その姉に対する想いは、母性であり、異性でもあり、いやそれ以上だった。禁じられた想いに悩み、一時はルミに逃避もするが、姉を忘れることは出来ない。世の中の全てを理解したうえで、自らの意思で外界との疎通を遮断している──誰でも思春期になると多かれ少なかれその傾向があるが、リョウはそのまま大人になろうとしている。それが弱者の証拠だという事実に序々に気がつき、覚醒していく。それはミカを守る立場になる事で証明されるが、二人は現実の世界では一度も言葉を交していない。

～Ryo's　Words～

●無遠慮にものを言うスミオに対して。「勝手に人を解釈して、その定義に当て込めるなよ。俺は俺で、アンタが決めた俺じゃない。人を上から見下して、どこからそんな口が出てくる？　屁理屈だろ？　コ難しく言えばいいってもんじゃないだろ？　人の言葉に惑わされるほど俺は弱くない…押しつけはやめてくれ。自分の事なんて、自分でもよく解らない、なのに、なんでアンタに解る？～…早く消えてくれ」●混乱するミカのイメージの中に現われて。「言ったろ、俺はすべてを許せるって。記憶にない思い出がそうさせている…だから…君を守るべき時が来た。ミカ…キミが考えることはない、そのままでいい…もうじき会える、必ず…」●ミトラに連れていかれそうになるミカを前に決意する。「…キョウコ、教えてくれ…許すことができるのか？　キョウコは許せたのか？　おれにできることって…なんだ。この女を守ること…わかったよ、やってみるよ。この俺にできることがあるかもしれない」●ミカを救出に向かうリョウをひきとめるヤヨイに向かって。「…どこだ、あいつは。教えないんなら、そこをどいてくれ。時間がない…キミとは、普通に会いたかった。そうすれば、誰も苦しむ必要はなかったのかも」●リョウの、覚醒。「…なんだよ。全部、俺自身の事だったのか。恐れることもないのか。弱くやってりゃ、どこかに楽園があるなんて、無意識にはまってたのか…。できるのか、俺に？いや…俺だからできる…？　だから俺の問題てっことか…まっ、なんとかなるだろ」

綱代台駅で、アリサと待ち合わせたミカ。ところがアリサは来ておらず、電車も事故のため発車が遅れるという。遅れてきたアリサは、そのまま電車に乗り込む。何故か停まっているはずの電車は、発車した。

車内で、無理に話題をつくり、会話するミカ。それは結果的に収穫があったかもしれない。子供だと思っていたアリサは、意外にしっかりとした考えを持っていた。ジェネレーション・ギャップは、今や一歳違うだけで存在する。

話の途中で、妙な事に気がついた。アリサとミカ、どちらが誘ったのか、電話をしたのかが思い出せない――わからない。突然睡魔に襲われ、眠るアリサ。ミカもまた眠ってしまう。

ミカが目を覚ますと、目の前にはミトラがいた。ミトラを思い出せないミカ。ミトラはミカにある体験をさせる。車内にいる人間の、心の内側の声を聞けるようにしたのだ。最初は面白がっていたミカだが、段々と人間の汚い内面を知り、落胆する。

そして、リョウも車内にいた。ミカを連れていこうとするミトラの前で、リョウは決断する。

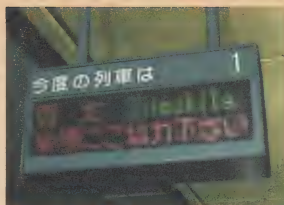
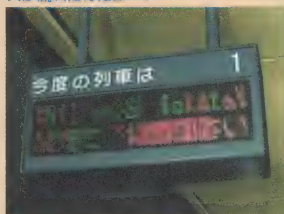
KAIBYO

雛代台駅

アリサと雛代台駅で待ち合わせしているミカ。アリサはまだ来ていない。そこに突然のアナウンスが。事故の為、しばらく停車するらしい。

アリサと雛代台駅で待ち合わせているミカ。すると、突然ホームにアナウンスが。霜北駅で事故が発生したらしく、しばらく停車するとの事だ。ひょっとして、また…自殺？　嫌な感じだ。そこにやって来たアリサは、何も知らずに電車に乗ろうとする。ミカが事故があった事を伝えようとした途端、発車のアナウンスが流れた。

「事故だって言ってたのに」

そのままアリサにせかされ、乗り込む二人。ドアが閉まる。発車する電車。ホームの電光表示盤の文字が、妖しくバグった。

アリサが来ると、何故か発車のアナウンスが流れたのだが…。

ミカとアリサが電車に乗り込み、ドアが閉まる。表示盤の文字が、バグった。

電車内

車内は空いていた。並んで座る二人。会話が無いのを気にするミカは、アリサに話題を振る。子供だと思っていたアリサは意外としっかりした考え方を持っていた。アリサを少し見直し、自らを見つめ直そうとするミカ。やはりユカリやチサトのように、アリサもミカに何らかの影響を与える存在なのだろう。

すると、アリサは今日見たという夢を話しだす。荒唐無稽だが、妙に哲学的(？)なアリサの夢。延々と喋り続けるアリサだが、ミカには理解出来ない。最後には、アリサが頭がいいのか悪いのか、分からなくなってしまう。

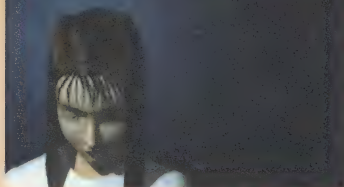
「…面白くない。殺さなきゃ」「いっぱい喋ったから疲れちゃった…ご愁傷様でした～」

アリサの夢。まずはゴジラとモスラとギャオスとレギオンが出現する。それらと闘う為に、ティガが現われ…。

やがて東京タワーの上にガメラが現われ、甲羅の下から元気玉を発射する。世界中が終わりに向かう。

まだまだ続くアリサの話だが、結局最後は「夢オチ」という事になってしまうらしい。

喋り疲れたと言うアリサに、ミカはこれからの予定を聞く。ここで、始めて気がつくのだが、お互い、どちらが誘ったのか、覚えていないのだ。ミカと約束があるから、アリサと約束があるから、それぞれこうやって電車に乗っている。原因を究明しないまま、寝入ってしまうアリサ。やがてミカも眠ってしまう。

しかしその時、向こうの車両から、何かが高速で接近しつつあった。ミカたちに、確実に迫ってくる…。

ゆっくりと目を覚ますミカの前には、ミトラが座っていた。ミカは、ミトラを覚えていない。不審に思い、怯えるミカに対して、ミトラは不思議な体験をさせてあげる、と言う。その体験とは、人間の心の中の本当の声を聞く事が出来る、というものだった。この遊びを、ミカはすっかり気に入ってしまう。

電車内〜人々の心の内側

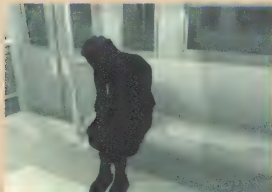
サラリーマン「…つらい…しんどいよ…財務の有田の体いいよな…無理だろうな、おれじゃ相手にされないだろう」

「…ほんと下品な人達」「うちのコが学校やめたのもこの人たちの子供に…」「いい人見つけて…不倫がしたい」

「鼻広がって、目的一直線じゃん…気付けよ！　別れたいのに」「それで待たせるって身分か？　とっとと広げろよ」

「…あそこにいる男の子とかって、わたしとかに興味あるのかな…快楽足りないよ、イジめたい…我慢出来ない」

「…疑問、感じるよ」「…サトミ、サトシの事みてた」「…オトナはバカ」「…勉強しよ」「…俺も」「…俺も」

「…殺してやりたい…俺に何がたりないんだ？　チャンスがあれば…なんとかしないと浮上できない…間に合わない」

「あの人のお陰でいい人生を送らせてもらった…早く迎えに来てくれないかねぇ…お爺さん、私は疲れましたよ」

「防衛は愛の言葉…護衛は愛の視線…結ばれることは誕生の瞬間…」「具体は死を意味して抽象は美を意味する…」

「…あの女こっち見てる…俺に惚れたか？　中の上は俺のゾーンに入ってないぜ…相当はしごしてそうだな…」

リョウの心の声を聞こうとするミカ。だが、何も聞こえてこない。「…なにも聞こえない…どうして…？ 拒否の意味？ まさか…眠り？」

リョウの前に現われたミトラ。その隣ではミカが眠っていた。リョウが目を覚ました…

「魔女の指図は受けない…おれは静かにしていたいんだ！」リョウの叫びも、ミトラは聞き入れない。

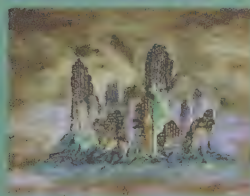
リョウが目を覚ますと、ミトラとミカが正面に座っていた。ミカは眠っている。
「…俺にかまうな…その女にもだ」
「惹かれているんだろ、ミカに？ キョウコの影を追っているんだろ…リョウの心はすべて見えるよ」
ゲームのように楽しんでいるミトラ。力の無さを痛感するリョウ。
「…契約だよ。ミカの魂に関してリョウは責任を負っているんだよ」
そして、ミカの内面を見せられる。知りたくなかった事実を前にしてリョウは絶叫し、ミトラは冷笑する…。

ミカの内面をリョウに見せつけるミトラ。リョウの入り込むすき間など、どこにも無い事をしっかりと焼きつける。

ミカの内面というよりも、本当の姿を具象化したイメージ。やはりこの年頃だと、こういうイメージになるのか。

放心状態になったリョウに、ミトラは安らぎを与え、ミカと共に去ろうとする。行かせてしまうのか…？

「…狂気の世界？　…これが罪なの？
いつの時代？　なにか意味があるの？
…誰でもしている事じゃない
これも罪なものなの？
あたしには重すぎる…もうヤダ…」
錯綜するミカの思考。意識が拡散する。

「…考える時間が必要なんだよ
ほらっ、あの光
あの奥に、あの奥に行けば、
なにも問題はなくなるよ
さぁ、ミカ…一緒に行こう」
ミトラは、ミカを誘おうとしている。

「いくな!…そいつは悪魔の化身だ!」
　覚醒し、叫ぶリョウ。しかしミカの意識はすでに「向こう」に行ってしまいそうだ。
　イメージがリョウの頭をよぎる。それは、ミカとスミオの…。ミカの顔に、キョウコがオーバーラップする。葛藤の中、リョウは決断する。
「…この俺に出来る事があるかもしれない」
　光に突入するリョウ。自分の意識で、リョウは「守る」べき存在になることを選んだ。

ミカを連れて行こうとするミトラの前で、リョウは葛藤し、結論を出す。ミカに重なるキョウコの姿…リョウはミカを「守る」決意をした。

快楽に揺れるミカ。その相手は…スミオだ。ミカにキョウコが重なる。だがそれは、今までの自分からの脱却のチャンスでもあった。

ミカを救うべく「光」の中に飛び込むリョウ。果たしてミカを守る事が出来るのだろうか。

眠るアリサにミトラは話かける。しかし、先ほどまでの邪悪なイメージは消えていた。一体ミトラとは?

目を覚ますアリサ。だが、周囲には誰もいない。ミトラも、リョウも、そしてミカも…。

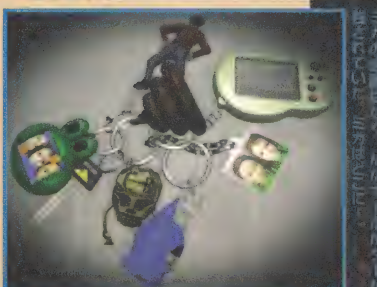
ミカとリョウ車内に消える

　車内。まだ眠っているアリサの横で、ミトラが語りかけている。
「リョウは奥手だから素直にミカを助けられない…どう思う?」
　そこには、邪悪さを感じさせないミトラがいた。まるで、二人の仲を取りもつかのような…。
　アリサが目覚めた時、周りには誰もいなかった。ミカを探し、車外に出る。そこは、始発の雛代台駅だった。電車は、動いていなかった…?電車内に戻ると、何かが落ちている。それはミカのキーホルダーだった。
「…そんな…じゃあ、どこ走ってたの…ミカ、どこいったの…」
　発車のアナウンスが流れ、ドアが閉まる。ミカとリョウは、どこへ…?

キョウコの顔がリョウの頭をよぎる。キョウコの代わりではなく、リョウ自身の考えでミカを守る…。

確かに電車に乗り、動いていたはずなのに…ミカが「事故」だと言った通り、電車は停まっていたのだ。では、先ほどまでの事は…?

ミカの[illegible]キーホルダーが[illegible]されていた。ミカはどこに…

キャラクターファイル #8

冬葉スミオ

飄々とした現代の大学生。だが、彼の論理武装とその唐突さ、衝動的な行動は一般人の理解を超える。その存在は大きい。

スミオは、キョウコの恋人であるはずだった。しかし、キョウコの中にはその意識は少なかったらしい…。それに気づいているスミオは、知らずとも女性が集まってくる自分の特性を利用して、様々なシミュレーションを行う。その結果、ある者はスミオの忠実な下僕となり、ある者はその反動で恐ろしい行動に出てしまう。リョウにとってスミオは大きな壁であり、それは重くのしかかる。だが、見方を変えればある種の試練なのだろう。また、キョウコの事故現場で、一瞬ではあるが、ミトラと話をしているスミオがいる。彼もまた、単に使い魔の一人だったのだろうか…。ルミにとっては永遠の憧れであるスミオだが、その魂の真実の行方はどこなのだろうか。

FILE 8

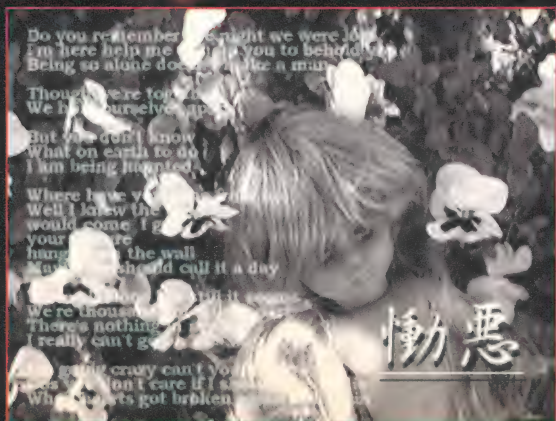
SUMIO TOWBA

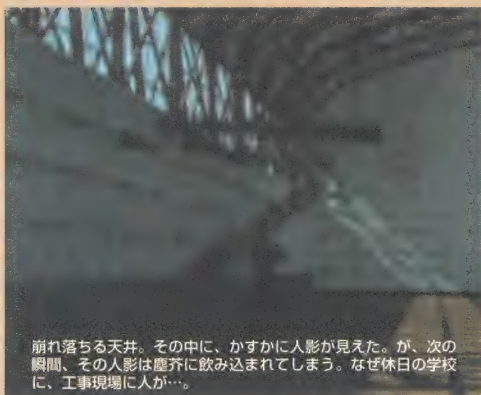
～Sumio's　Words～

・リョウに向かって厳しい意見を言う。「情けないヤツだな、キミは。キョウコの何も解っていない。弱さを振りかざして、己は静観するだけ…すべての負担はキョウコにかかる。どんなにスタイルを決めても、今のキミはただのマネキンだよ。弱い事を言い訳にして、それで満足なのか？　弱者をどこにしまうかだろう？　弱者は弱者でしかない…そこに美しさや、はかなさなんてない。ただ、朽ち果てればいい。リョウ、キミはもっと自分を知るべきじゃないのか？　許されない事だよ、弱さなんて…」・ヤヨイと共に、リョウの前で復讐を宣言する。「自分に何かの欠落があるのかと悩んだよ…しかし、サンプルを用いても僕に欠落はなかった。サンプルたちは僕を必死に愛してくれた…このヤヨイも含めてね。見てごらんよ、ヤヨイはこんなに一生懸命に…許せないんだよ、だからこそ。なぁ、キミにとって一番辛い事って何だ？　それを考えたよ…キョウコと僕を苦しめておいて、キミはあまりに無邪気過ぎたからね」・クラブで声をかけてきた女性から、自分のファンクラブの存在を聞いて。「…そう、そんなのあったんだ。バーリ・トゥードな世界になったよ…全くもって、世紀末だ」・リョウのイメージの中、美しい草原にて。「…リョウくん、正直に生きてゆくのは確かに辛いことかもしれない。でもね…キミはこの自然を目のあたりにして、それでもまだ、偽ることはできるかい？　僕はできないよ…僕は教えられた気がする。変えてゆくことが可能に感じる。繊細なバランスさえも白々しく、怯えの形でしかない。強くなければならない。…リョウくん、強さに臆してはいけないんだよ…キミには解る筈だ」

慟悪

電車の中から消えたミカは、学校にも来なかった。心配するアリサはユカリに相談し、行方不明となったミカの情報収集を始める。だが、何も有力な手がかりはない。
ところが先日、旧体育館を解体している現場で、２年の生徒が塵芥の下敷きとなり、死んだという。まさか、ミカが？　その日当直だった広瀬に話を聞くと、それはミカではないが、ミカの友人の香坂ミキだった。確実にミカの廻りに漂っている死の空気。それは、ミカの捜索の手助けをしてくれたカヅキ、さらに夜の学校でミカを見たというミユキにまで及ぶ。ある夜、フミコが帰宅していないから学校を捜索したい、とミホから電話がかかり、アリサはユカリとチサトを誘って深夜の学校へ集まる。しかしそこでは、誰も予測しなかった惨劇と、凶行が待ち受けていた…。

DOWAKU

雛代高校

解体工事中の現場。老朽化した体育館は壊され、新しくなる。クレーンの鉄の爪や鉄球が容赦なく食い込む。

崩れ落ちる天井。その中に、かすかに人影が見えた。が、次の瞬間、その人影は塵芥に飲み込まれてしまう。なぜ休日の学校に、工事現場に人が…。

　校舎は新しくなったが、雛代高校にはまだ古い建造物があった。古い物は壊し、新しい物へと造り変える――最後に残ったのは体育館だった。クレーンが周りを取り囲み、鉄球が二度三度とぶつけられる。破壊の歴史と共に、人間の文化は発展してきた。
　崩れ落ちる天井。しかし、その中に人影があった。抗える術もなく、その何者かは塵埃に飲み込まれ、やがて見えなくなった。
「おーいッ、作業をやめろー！誰か下敷きになっているぞー」
「…ここの生徒が、解体作業中に下敷きになったみたいなんだ」
　飛び交う怒号。解体現場はパニックになる。遠くから近づいてくる救急車のサイレン。また、人が死んだ…。

ミカと一番仲の良いカヅキも、特に心当たりは無いと言う。不吉な想像をする一同

　特別講習の為に学校に残っているユカリは、アリサに呼び出される。ここ数日間ミカが行方不明だという。そう、アリサが最後にミカとあったのは、雛代台駅での、あの不思議な体験をした時だった。さらにラクロス部の合宿もサボったらしい。ユカリはミカに連絡を取るがＰＨＳはつながらず、自宅も両親は海外旅行中で留守。
「あいつも一緒に行ったんじゃない？」
　だがアリサは、そんな話は聞いていない。
「そーいえばそーだね。あのコの性格からいって海外行くとしたら、出かける前に必ず自慢するはずだしなー」
　心配を通り越して不安になる二人。早速心当たりに聞いて廻る事にする。
　チサトも最近ミカには会っていなかった。家出というのも考えられるが、特に変わった様子も見られなかったし…。次に、ミカと一番仲の良かったクラスメート、カヅキに話を聞きに行く。カヅキもまた、思い当たる事は無いと言う。誘拐、事故、自殺…不吉な想像ばかりしてしまう。とりあえずアリサはミカの自宅に様子を見に、ユカリとカヅキはラクロス部の部室に向かう。しかし、手がかりすら掴めない…。

ラクロス部の部室。ミカのロッカーを調べていると、マンガの本や雑誌、お菓子やゲームソフトに混じってナイフが見つかった。結局、手がかりは得られなかった。

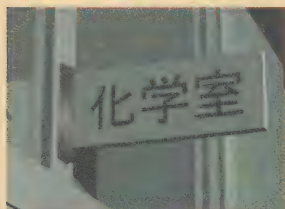
2年3組教室

ミカの教室。何人かのクラスメートに話を聞くが、それらは全てミカの日常の生活姿勢を浮き彫りさせるだけで、何も手がかりにならない。ゲームにハマってる、グラビアデビューした時の為のサインの練習、本屋で少女漫画の立ち読み…。放課後の行動と言えば、ゲーセンで遊んだり、カラオケで歌ったり、クラブで踊ったり、知り合いのバイト先に顔を出したり。

ミカの机を調べてみると、置き忘れた手帳があった。開いてみる。そこに書かれていたのは…やはり、遊ぶスケジュールばかり。だが、少なくとも海外に行っていない事がわかった。

ところが、気になる情報を聞く。この間の休日、旧体育館の取り壊しで、この学校の生徒が下敷きになって死んだらしい…。

ミカの行方をクラスメートに聞き込み。だが、わかったのはミカが普段どれだけ遊んでいるかという事だけ。ところが、突然気になる情報が…。

化学室

旧体育館での事故の日、化学の広瀬が宿直だったと言う。事故にあったのは誰かを聞きにいく二人。事故死したのはミカではなかったが、友人の蒼坂ミキだった。ショックを受けるカヅキとアリサ。一体ミカはどこに行ったのか…

事故にあって死んだのは、ひょっとしてミカ!? ユカリとカヅキはその日宿直だったという化学の広瀬に聞きに行く。

死んだのはミカではなく、ミキだった。ミカの友人だ。なんでもミキは、解体工事で立ち入り禁止だったにもかかわらず、解体中の旧体育館の中にいたという。詳しい事は、現在警察が調べているらしい。ショックを受けているカヅキ。ミカが行方不明、ミキが事故死…。

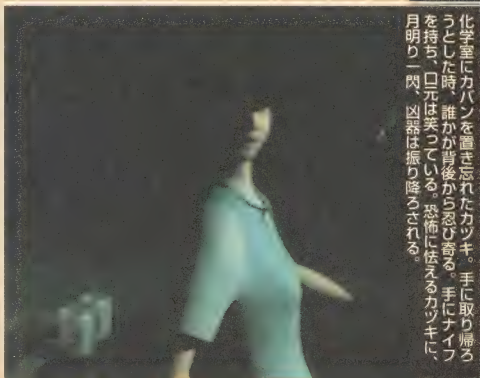
突然、ユカリのＰＨＳが鳴る。相手はアリサだった。ミカの自宅には誰もおらず、新聞紙が郵便受けにたまっているという。ユカリは、アリサにミキの事を伝える。

「ひゃ～ッ、ミキ死んだんですか？」

アリサもショックを受けたらしく、黙りこんでしまう。ますます、良くない方向に考えがいってしまう。

化学室を出た二人。カヅキは部活があるため、ここでユカリと別れる。

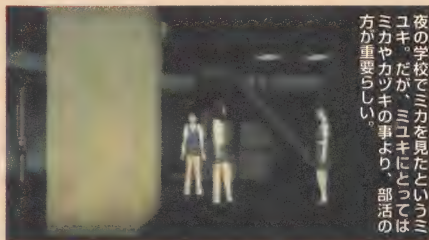
夜。部活を終えたカヅキは、部員と共にバスを待っていた。だが、カバンを忘れてきたことに気づき、部員たちと別れて一人、部室に戻る。だが、そこにカバンはない。と、ユカリと化学室に行った時に置いたままだったのを思いだし、暗い校舎の中を移動する。

化学室。やはりカバンはあった。手に取り、帰ろうとするカヅキの背後に、何者かが迫ってくる。暗い教室内では、その顔は明らかではないが、どうやら女性のようだ。わずかな月明りで見える、振りあげられた…ナイフ。カヅキの顔が、恐怖に歪む。

化学室にカバンを置き忘れたカヅキ。手に取り帰ろうとした時、誰かが背後から忍び寄る。手にナイフを持ち、口元は笑っている。恐怖に怯えるカヅキに、月明り一閃、凶器は振り降ろされる。

雛代高校・朝

朝の学校。既に警察の鑑識が捜査中だ。凶行現場となった化学室からも、今のところ何もでてきていないようだ。目撃者もいない。カヅキの親は別居中で家を空ける事が多いため、朝になった始めてカヅキがいない事に気がついたらしい。

天文台

マイナーな存在の為、あまり知られていない天文部。そこにいるミユキが、夜にミカらしい人影を見たと言う。ユカリとアリサは会いにいくが…

夜の学校でミカを見たというミユキ。だが、ミユキにとってはミカやカヅキの事より、部活の方が重要らしい。

翌日、登校してきたユカリは、チサトの口からカヅキの死を聞かされる。チサトは、何か得体の知れない力が動いているように思え、不安でならないという。ショックを受けたユカリに、アリサがミカの情報を持ってくる。天文部のミユキが、部活で遅くまで残っていた時、ミカらしい人物を見たそうだ。二人は校舎のはずれにある天文台に向かった。

床に赤いモノが…!?

天文台にミユキはいた。ミカについて質問するユカリだが、ミユキは一切関係ない、という姿勢だ。カヅキの件に関しても、全然気がつかなかったと言う。行方不明の友人や殺人事件よりも、天体観測の方が大切らしい。あきれて天文台を後にする二人。だが、ミユキが見たのが本当にミカだとしたら、授業にでないで夜の学校を徘徊していることになる。

次の日、アリサの教室に行くユカリ。だがアリサは、ミユキを探しに行ったきり戻ってこないと友人が言う。ユカリは、天文台に向かった。

中に入ると、ミユキもアリサもいない。ところが、何か床についている…血!? ユカリはあたりを見廻した。顔をあげると、そこには変り果てたミユキの姿が…。

ミユキに会いにいったアリサを探して、ユカリは天文台に向かう。だがそこで待っていたのは、凄惨な現実だった。昨日話をしたミユキは、天体望遠鏡の駆動部に巻き込まれて…。

ミホ自宅

両親の引っ越しの関係で、現在一人暮しのミホ。深夜フミコの母から、フミコがまだ帰ってきていないと電話があった。時期が時期だけに心配だ。

ミカがいなくなってから、既に二週間。ユカリたちは捜索を続けているが、何ら進展は無い。それどころか、ミカの知り合いが次々に姿を消していくので、協力してくれる人もかかわり合いを避けるようになってしまった。

そんなある晩、ミホのもとに電話がかかってきた。それは友人のフミコの母で、まだ帰宅していないと言う。もう0時を回っている。電話を切った後、ミホはアリサに電話する。フミコを探すので、協力して欲しいという電話だ。

夜の学校の前に立つユカリ、チサト、アリサ。ただでさえ事件が頻発しているというのに、夜ともなると一層不気味で危険な感じがする。アリサは中に入るのを、かなりためらう。さすがのアリサも、腰が引けまくっているようだ。

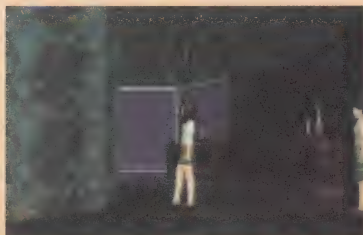
雛代高校・夜

深夜の雛代高校正門前。アリサとユカリ、チサトもいる。ミホの電話を受けたアリサが、二人を誘ったようだ。フミコは最近遅くまで学校に残る事があったので、学校を捜索しようというのだが、ミホの姿が無い。アリサによると、先に来ていると言ってたそうなので、中に入ろうと言うユカリ。少し泣きの入っているアリサ。

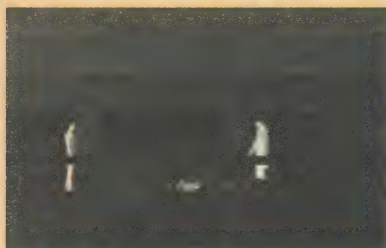
昇降口で、誰かの気配を感じる。警備員かと思ったら警官だ。学校で頻繁に事件が起きているので、警察も警戒しているのだろう。

三人は別々の場所ほ調べる事にする。ユカリは校舎を上へ、アリサは地下、チサトは外。警官に見つからないようにして教室を回りながら上の階へ移動していくユカリ。だが、ほとんどの教室に鍵がかかっていて、入れない。やがて、放課後は立ち入り禁止となっている最上階にまで入る。そこには校長室があるが、やはり鍵がかかっている。突然、PHSが鳴る。それはアリサからで、アリサはまだ一階にいると言う…。

巡回している警官

校舎の中は、警官が巡回していた。こんな時間に校舎内にいるのが見つかったら、やっかいなことになりそうだ。

それぞれが場所を分担して捜索を開始する。ユカリは校舎を上に上がって行くが、ほとんどの教室に鍵がかかっていて、入れない。一体フミコやミホは、どこにいるのだろうか。まさか、また…。

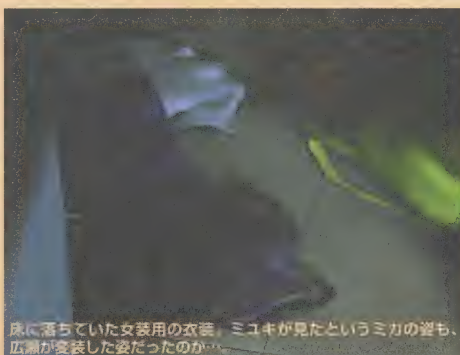
新館地下２階

誰もいないと思った生物室に入るアリサ。そこにはミホが倒れていて、その傍らには広瀬がいた。まさか、広瀬が…!?

ユカリにどやされたアリサは、ビクつきながらも立ち入り禁止の地下に降りていく。かなり怪しい雰囲気だ。だが、地下はすぐに行き止まりになっているし、誰もいない様子だ。アリサは引き返す。その時、背後で物音がした。

一方、ユカリはチサトと電話で話していた。外にも誰もいなかったらしい。「…ユカリちゃん、今日の宿直の先生が誰だか分かる？」「確か広瀬だと思ったけど」「前にも広瀬先生が宿直の時に事件が起きてなかったっけ？」

桂木が大変なんだ、
早く手当をしないと…

「なんだ鹿原、おまえ俺のこと疑っているのか？おれは宿直で見回りに来たら、こいつがここで倒れていたんだ…」迫ってくる広瀬から逃げようとするアリサ。その時、警官が駆けつけた。だが広瀬は、警官の制止に従わない。やむなく、警官は発砲する…。

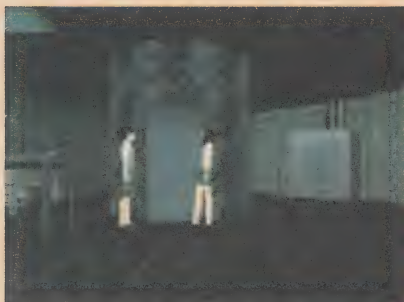
物音は生物室から聞こえてきた。中に入ってみると、奥にミホが倒れている。その横には、広瀬が立っていた。アリサに迫る広瀬。逃げようとするアリサ。その時、警官が駆けこんで来た。「止まれっ、動くな！」拳銃を構える警官。だが広瀬は止まらない。「ちっ、違う…俺じゃない、俺じゃないんだ！」銃声――広瀬がその場に崩れ落ちる。ミホは既に死んでいた。広瀬もまた、助からない。駆けつけたユカリとチサト。アリサは泣き崩れる。床には、女装の為の衣装が落ちていた。

床に落ちていた女装用の衣装。ミユキが見たというミカの姿も、広瀬が変装した姿だったのか…。

真実は・・・・・・？

学校を出たユカリたち。だが、チサトの様子がおかしい。黙り込んで、何か考えている。どうやら、何か引っかかっている部分があるらしい。真実を知るべく、二人はもう一度校舎に戻る。

チサトが怪しいと思ったのは、地下の突き当たりだった。この向こうに何かある、と感じるらしい。その場所に行く為の通路を探しているうちに、受付にある大理石の支柱が異常に太い事に気づく。この柱がつながっているのは、校長室…。

ユカリが来た時には鍵がかかっていたが、今度は開いていた。中に入り調べてみると、柱に何かのスイッチがある。それを押すユカリ。すると、機械音と共に、柱の隠しドアが開く。エレベーターになっていたのだ。乗り込むと、上に登っていく。ドアが開くと、そこには無数のモニターがあった…。

鍵のかかっていた校長室。中に入ると、大理石の柱にスイッチを発見。ユカリが押すと…。

業務用の冷蔵庫を開けてみると、そこには標本のようなものが並んでいた。そのひとつには「香坂ミキ」と…。

校長室の上にあった部屋には、無数のモニターがあった。コントロールパネルの上には、ミカの学年の身体測定一覧表が置いてある。「アタシたち、ここで監視されてたんじゃない？」次に二人は下へと向かう。

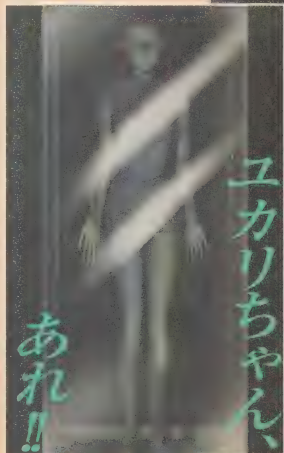
エレベーターが開くと、消毒液の匂いが充満していた。まるで手術室のようだ。大きな冷蔵庫──業務用だろうか、ユカリがそれを開けると、中には硝子の容器が並んでおり、その中には液体と、何か得体のしれないモノが入っている。そして容器のひとつに、「香坂ミキ」と書かれた紙がついていた。

突然、チサトが絶叫した。駆け寄るユカリ。二人の前にある、大きな硝子の標本ケースの中…そこにあるは、縫い合わされた人間だった。しかもその顔は…。

「キ、キミカッ!?」

恐怖が襲ってくる。同時に危険も感じる。二人はエレベーターに乗り込んだ。見てはならないものを見て、二人は混乱しつつも実態を把握し始めていた。

エレベーターが止まり、ドアが開く。急いで外に出ようとしたが、校長室のドアが開かない。どうやら二人は、捕えられてしまったようだ。危険が忍び寄る。

キミカの顔、そして全身に縫合された後がある「造られた女性」。一体、何が目的でこんな事を…。

校長室

そこにいるのはユカリたちの知っている校長ではなかった。その顔は狂気に歪み…まるで、何か邪悪なモノに支配されているかのようだ。そしてゆっくり近づいてくる。

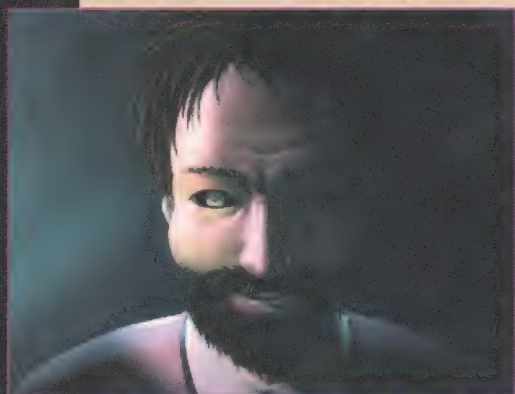
「どのクラスの生徒だかしらんが、勝手に人の部屋に入るのはよくないな」

どこからか、校長の声が聞こえてきた。その声はいつもと変わらず、優しく語りかけてくる。それは、逆にユカリとチサトに恐怖を感じさせた。

「君たちはこんな時間に外出していいのかね？　ご両親が心配されるではないか。いろいろ問題事が多いとＰＴＡもうるさいんでね…全く君たちにも困ったモノだな」

エレベーターのドアが開き、ゆっくりと校長が降りてくる。口調こそ変わらないが、その表情は狂気に歪んでいた。そのままゆっくりと二人に近づいてくる。

「私のコレクションを見たかね、なかなかのシロモノだろう？　あれだけのパーツを集めるのに、一苦労したがね…」

追い詰められるユカリとチサト。

「安心したまえ、何も怖がることは無い。魂を肉体から解放してやろうというのだ…真の自由を得るためには肉体の中では窮屈すぎる。…何も怖がることはないのだ」

校長の手に、凶器が光る。ドアは開かない。窓の外には月が輝いている。

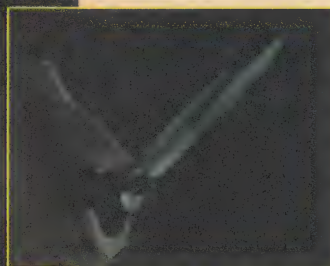
その時、何か不思議な力が働いた。いつも妖しく輝いていた月が、より一層光を放ったかと思うと、階下の大理石の支柱に亀裂がはしり、音をたてて崩れ始めた。

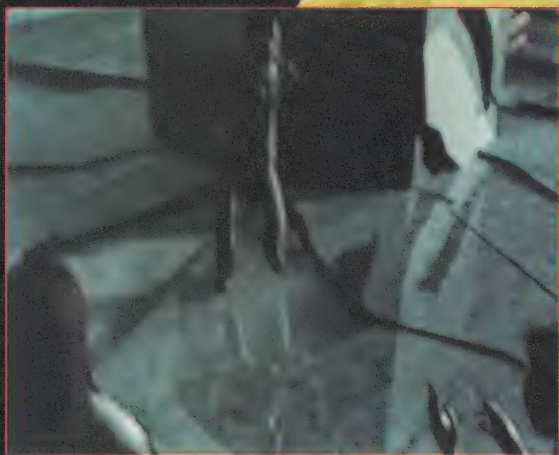
それは、一瞬の事だった。床は割れ、塵芥と共に、校長は落下していった…。

校長室の扉には鍵がかかっており、完全に閉じ込められた。迫りくる校長の凶刃に、怯えるユカリとチサト。二人もまた、校長の狂った芸術に使われてしまうのか…。

君たちは
私のすばらしい
芸術作品の一部となり
生まれ変わるのだ

ゆっくりと迫ってくる校長。暗闇から、満月の光が降り注ぐ室内へ出てくる。狂気に歪んだその表情…月はまたも、妖しく見守るだけなのか!?

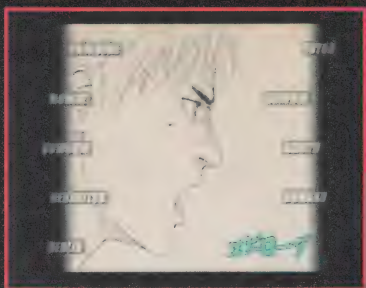
おそらく何人もの血を浴びたナイフ。ミキも、カツキも、ミユキも、ミホも、そしてまさか、ミカも…？　その凶行は誰にも止められないのだろうか…。

月は、いつも見ていた。真実も、凶行も…だが、いつも沈黙したままだった。だが、二人が校長の手にかかる寸前に、その妖しい力が発動する。

月の力のせいなのか、突如崩れだした大理石の支柱

その亀裂が狂人と化した校長の足下を襲う

断末魔の叫びをあげながら校舎もろとも崩れゆく校長

EPIROGUE エピローグ

怖がっている……

真っ先にミカの存在を感じとったのは、チサトだった。同時に、ミカを救出に向かう際のユカリの身を案じている。「今度はただの探検にはならない…」

ユカリには、チサトやアリサのような能力は無い。しかしこの時、助けを求めるミカをはっきり感じていた。「…さあ、行こう。ミカだけでもさ…」

……どこなの

……学校だよ

アリサもいつになくシリアスになっている。それほどの危険をここから先に予感しているのだろう。「…本当に危険だよ。いいの、ユカリ」

はやくしないと……

ミカの存在を感じていたのは三人だけではない。リョウにも戻ってきたミカが雛代高校にいるのがわかった。救出に向かうリョウの前に、ルミが現われる。これまでの体験をルミに語るリョウは、自分のすべき事を理解していた。自覚し、変貌していた…。「人はな、2つの種類しかいない。死ぬべき人間とそうでない人間…ルミ、おまえは後者だよ」そう言って、歩き出すリョウに、ルミは素直に言葉をかける。「…ミカを助けてあげてね」

「…こんばんわ、アリサ」やって来たミトラは、邪悪さを増している。ミカを探すアリサを、排除しようとして…。

校舎に入ったユカリたちは、それぞれ別れてミカを探すことにする。別れ際に、ユカリはアリサに言った「アリサ…しっかりね」気配を感じ取りながら新校舎内を歩くアリサが5階にやって来た時、突然感覚に反応があった。「…来たっ！」振り向くと、暗闇からミトラが現われた。アリサは、ミトラが何者なのかを理解し、ミカの行方を聞く。だが、今のミトラは数段邪悪で、攻撃的になっている。「…知らないよ、言うことを聞かないと」「…ボクちゃん、アリサをナメてもらっちゃ困るな～」アリサも臨戦体制になった。ミトラが再び、暗闇から現われる。「…やだな～こういうのイヤなんだけど…」

ユカリのもとに現われたミトラ。チサトは真実を伝えるが、ユカリには信じられない。その甘さが、命取りに…。

受付で待ち合わせる予定だったが、チサトの時計は遅れていた。不吉な予感と共に駆けつけると、そこには…ユカリとミトラがいた。「…チサト、このガキなんなの？」その邪悪さを感じ取れないユカリ。「…ユカリちゃん、このコだよ。このコがミカちゃんを…」だが、ユカリには信じられない。「ぼくは何もしてないのに…ひどいよ」普通の子供を演じるミトラ。そっと手を差し出す。「…お姉ちゃんにプレゼント」体の自由が奪われるユカリ。そして、差し出された手を凝視する。そこには、アリサの…。「ユカリちゃん、見ちゃダメッ!!」

ここには永遠に
悪しき念が定着する
…そして、悲劇は繰り返される

血の色は
涙の無色に浄化されて
安息のない眠りにつく

ユカリを支配され、その怒りが頂点に達するチサト。ミトラとの会話の中で、どうやら以前からお互いを知っていたと思われるやりとりが。一体チサトは何を知っているのか…そして、ユカリはどうなる？

無垢な子供を演じていたミトラが、邪悪さを取り戻してくる。冷笑しながら、チサトの攻撃を誘う。その力は…。

ユカリの瞳孔が開く。その意識は、今やユカリ自身がコントロールしているのではなかった。不自然な動き。操られ、その場から立ち去ってしまう。残されたチサトは、ミトラと向き合っていた。ミトラは、つい先ほどまでの子供の顔ではなく、邪悪さが戻ってきている。「…どれくらいぶり？　冴えない格好して、おまえらしくもない…」チサトは、ミトラとどんな関係が…!?　やがて、二人の間に緊張感が高まり、オーラが発生する。「…許さない、絶対に許さないよっ！」激しい感情を露わにするチサト。しかしミトラは笑顔すら見せている。「…いつでもどうぞ、お好きなように。…手加減はしないでね」

そのときユカリは、校舎の中を歩いていた。やがて昇降口にたどり着く。その後ろに、スッとミトラが現われる。「ダメだよ、まだ物語の途中じゃない。逃げ出すなんて、お姉ちゃんらしくもない…」

ヤヨイの制止を振り切るリョウ。自分のすべき事を今やはっきりと自覚している。あとは、行動を起こすだけだ…。

校舎の中に入るリョウ。そこには、ミトラとユカリたちが闘った痕跡があった。リョウの前に、ヤヨイが現われる。「どうして戻ってきたの？　あなたはここに来てはいけないのに…」

リョウは進むことをやめない。

「キミとは普通に会いたかった。そうすれば、誰も苦しむ必要はなかったのかも」

赴くリョウに、ヤヨイは言葉をかける。

「リョウ…死なないでね…本当に…」

暗く、黒い念に包まれた校舎内。足音が近づいてくる。

それは、リョウを導く者だった。

…そして結末は

それは、誰かのための行動ではなかった。全ては自分の為にすべき事だったのだ。ユカリも、チサトも、アリサも、ミカの為にとった行動は、そのまま自分の為の行動だった。恐れることは無い。生きる価値は、自分の中にしかない。人が死ぬ事も無意味な事ではなく、死の価値を選んで…選べるってこともなくはない。

ミトラに立ち向かう。それはリョウ出来るのかどうかではなく、リョウだから出来る事。だからこそ、それはリョウの問題となる。

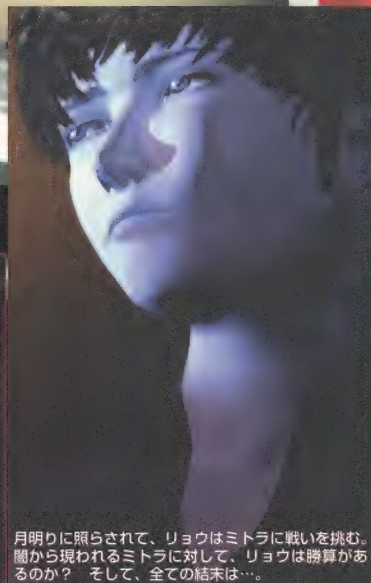
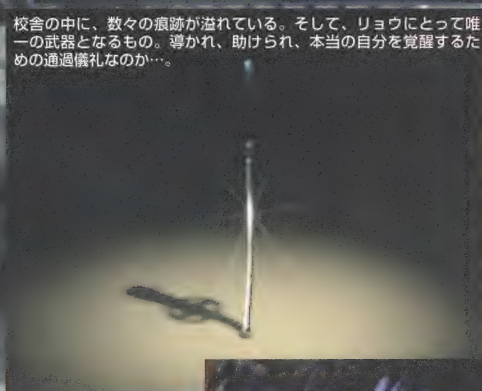
「まっ、何とかなるだろ…」

方法は、わかった。あとは、自分を信じてどこまで出来るか。やがて、暗闇からミトラが現われる。その表情は歪み、今までで最も冷たく、邪悪な存在として…。

リョウが、挑んでいく。

月だけが見ていた…

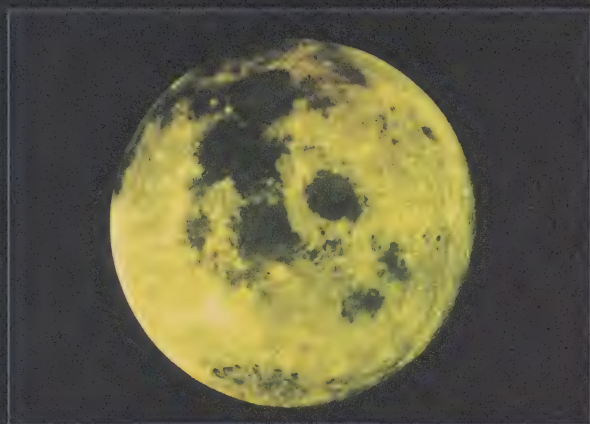
未だ確認出来ないミカの存在。この邪悪な校舎にいるのか？ その魂が助けを呼んでいる。リョウは声に導かれるように、そして自分自身の為にミカを助ける。

校舎の中に、数々の痕跡が溢れている。そして、リョウにとって唯一の武器となるもの。導かれ、助けられ、本当の自分を覚醒するための通過儀礼なのか…。

月明りに照らされて、リョウはミトラに戦いを挑む。闇から現われるミトラに対して、リョウは勝算があるのか？ そして、全ての結末は…。

あとがき

月は、不思議な力に満ちている。

南米ボリヴィア、海抜4千メートルの高地にあるティティカカ湖畔に広がるティアワナク遺跡。そこでもっとも目を引く「太陽の門」には、太陽神ビラコチャが彫り込まれ、その周囲にある48の紋様と共に、古代の天文カレンダーだとされている。その、一見華やかな「太陽の門」と対極にあるのが「月の門」だ。それは遺跡のはずれにあり、ごく目立たないもので、立ち寄る観光客も少ない。

森羅万象は全て対になり、存在している。太陽と月、男と女、表と裏、光と闇…。月は女であり、裏である。しかし、闇ではない。満月の夜、月は妖しく光る。それ

は人間の裏側の複雑な内面に作用する力を持っている。

「月」がテーマであり、ポイントとなるこの「ムーンライトシンドローム」は、今までのゲーム概念から発展した、ビジュアル・サイコ・ホラーだ。ユーザーは既存のゲームのような楽しさとは違った、まるで小説の中に引き込まれるような感覚を得られる。

このゲームを通じて、意識変革をする世代も必ずいる。現実逃避と言われるゲームではあるが、本作は逆にフィードバックすることも可能だと証明してくれた。

どう自分の意識が変わったか…これが今、一番興味深く、楽しみだ。

1997年10月　薮中博章

コンプリートデータファイル
ムーンライトシンドローム解析文書

1997年10月16日 初版第1刷発行

著者
薮中博章

デザイン
玉手峰人
後藤淳
タケイチサト

編集人
北出正行

発行人
福田博人

発行所
株式会社白夜書房
東京都豊島区高田3-7-11
03-5950-5101（営業部）
03-5952-7917（編集部）

印刷・製本
凸版印刷株式会社

「ふざけるな、このガキッ!」
「…わかってないね、リョウ。リョウに選ぶことなんてできないんだよ。僕がやりたいんだから、ちゃんと遊ばなくちゃ」
「…キョウコを…キョウコを殺したんだな? おまえが、おまえが。おまえが!!」
「言いがかりはやめてよ、キョウコは事故で死んじゃったんでしょ? ボンッ、とさ。ぼくはキョウコと遊びたかったのにさ…だから、代わりにミカにするんだよ。でも、ミカも死んじゃった…助けてあげたいんだよ、どうしても」
ミカの嗚咽が聞こえてきた。それは段々大きくなり、やがて哀願するような声になる。
「……けて…た…て、た…す…け…て……」
ミトラがクックッと笑う。
「ほら、ミカも助けてって言ってるじゃないか。ぼくはいい子だから、見過ごすなんてできないんだよ。ねえリョウ、助けてあげようよ」
「クッ……いいだろう……どうすれば助かるんだ!?」
「ホント? ホントにホント? キャハハハ、やったやったー! やっぱり、リョウはスミオより大人だね。じゃあ、ぼくと約束してね。えっとね、ただ助けるだけじゃ不公平だから、ぼくにご褒美をちょうだい! ミカを今、助けてあげるから、これからリョウが一番最初に抱きしめた人間を、ぼくがもらうね」
「……何を言ってるんだ」
「ダメだよぉ、約束したんだから。ねっ? 生きている人間だよ? リョウが抱きしめた人、誰でもいいから、ね? 絶対守ってよ。約束だよ、リョウ……」
ミトラの姿がかき消えた。リョウの意識が、一瞬途切れる。再びリョウが覚醒したのは、明け方近くのことだった。
「俺は生きてる…すべて終わったんだ、綺麗に何もかも…」
歩き出す。自然にリョウは雛代高校を後にした。どこをどう歩いたのか、気がつくと、ミカと初めて会ったあの土手に来ていた。
「……ゆっくりと休みたい…終わったんだ、悪夢は終わった…」
ふと、リョウの視線が土手の前方に向けられる。そこには、まるで夢遊病者のようにフラフラと歩く——ミカがいた。
「……ミカ!!」
走り出すリョウ。段々ミカの姿が大きくなる。触れ合う距離になった瞬間、目と目が合う。しかしミカはそのまま崩れ落ちそうになる。
抱きとめるリョウ。そのまま、しっかりと抱きしめる。
「……そういうことか」
どこからともなく、ミトラの声が聞こえてきた。
「……終わらないよ、まだ」

覚醒したリョウが挑んだ、自分の為の闘い。そして結末は意外な方向へ進んでいく。決して邪悪な存在は屈したわけではなく、「取り引き」は既に交わされていた…エンディングムービーの真の意味が、明かされる。

「嫌だ！まだ終わっちゃいない！俺は…救えないのか？誰も守る事が出来ないのか⁉　キョウコ――姉さん、もう俺のことはほっといてくれ！　変わらなきゃ、今変わらなきゃ、俺はずっと守られていかなければならないのか⁉」

ブンッ――草原は消え去り、リョウの周りが闇となった。ボウッとミトラの姿のみが浮き上がっている。

「えへへ、凄いよリョウ。立派な事を言えるようになったんだね。キョウコもきっと喜んでるよ」

ミトラの声が、直接頭の中に流れ込んでくる。

「よっぽどリョウは、ミカのことが大事なんだね。でも、ちょっと自覚するのが遅かったみたい。ホラ、死んじゃったよ。キョウコの時よりも簡単にね」

「…何だと、どういうことだ。まさかキョウコもお前が…」

「だって、僕たちはお友達だもん。キョウコも、スミオも…リョウのことだってよく知ってるしね」

「何だ、一体お前は何をしようとしてるんだ！」

「…別に、何もしようとしてないよ。みんなで遊びたいだけだよ。ミカとも、リョウとも一緒に遊びたいだけだよ。難しい事は考えないで遊ぼうよ。さあ…」

しばしの無言──月明りに照らされ、その表情が読み取れないキミカが口を開いた。
「ミカちゃん…恋人っているの？」
「えっ？　あ、はい。一応います…」
「そう…どんな人？」
「あの、さっきのクラブで知り合ったんですけど…」
　風の音が大きくなった。キミカは微動だにしない。
「ミカちゃん、あたしね…気がついたんだ。あたしは本当に好きだったのに、相手は遊びだったたんだ」
「キミカさん…？」
「バカだよね、あたしも。何も気がつかないで、一人で舞い上がって…連絡もこないし、いるはずの場所に行ってもなかなか会えやしない。…もう三か月だよ。忘れりゃいいさ、遊びだったんだ、って。でも、無理なの、忘れられないの。だって、私の中には…」
「………」
「ごめんね、なんかグチっぽくなっちゃってさ。本当は話すつもりは無かったんだけど。あたしもミカちゃんみたいになりたかったな。みんなに人気があって、先輩や後輩と楽しく遊んで…あたし、友達いなかったし、不器用だったから…」
「………」
「ごめんね、さっ、行こう。あんまり遅くなっても何だから…」
「……はい」
　ミカが車の方に歩きだす。その姿を見ながら、キミカは決心していた。
「キョウコさんから奪う事ができたと思ったのに…やっぱりあの人は、あたしなんて問題にしてなかったんだ。ごめんね、ミカちゃん。あなたはいいコだけど、彼だけは渡したくないの。だから、私だけのものにするために、私のルールで決着をつける。ごめんね、本当に…」
　そっと自室に入ると、ミカはベッドに横たわった。
「別れ際、キミカさん、泣いてたような…それに、また遊びましょう、って言ったのに答えてくれなかったし…私、何か悪い事言ったのかなぁ」
　ゴロンと体を転がらせ、ＰＨＳを見る。
「…今日は連絡、無いのかなぁ」

～「夢題」へと続く

「あ、どうも、鈴木と言います…」
「どーもー、ミカちゃんでーす…キミカさん、待ち合わせしてた人って?」
「うん、こいつ。あ、誤解しないでね、ただの友達だから。電話したらヒマだっていうんで、向かえに来てもらったの。さてと、じゃあ…あ、ミカちゃんまだここにいる? よかったら乗ってかない?」
「えっ、いいんですか? やった、歩いて帰るの、かったりーと思ってたんですよー」
「フフッ。じゃあ、行こっ」
二人は、出口に向かって歩きだす。男が前を歩いている時、キミカがそっと耳打ちしてきた。
「友達っていうか…単なる足代わりなんだ」
目を合わせ、二人はクスッ、と笑った。
クラブ前の路上で待っていると、男が車を廻してきた。
「…すっごーい、外車じゃないですかぁ」
「アルファロメオのジュリアっていうんだ。親父さんが金持ちらしくてね、まったく、いい身分だよ。さあ、乗って」
二人は後部座席に乗り込んだ。やがて車は発進し、めまぐるしいネオンの波が流れ出す。男が口を開いた。
「えっと、ミカちゃんの家ってどのへんなのかな?」
「あのー、ピラミッド御殿って呼ばれてる…」
キミカが乗り出す。
「あそこならさ、麗月峠に抜ける道から、ムーンブリッジの方にいけるじゃない。ミカちゃん、通っていかない?」
「ホント? イエーイ、岸井、まだ行ったことがないんですよ!」
「じゃあ決まりだね。ねえ、わかった? ムーンブリッジだよ」
男はうなづき、車を加速させる。市街地を一旦抜け、峠に向かうバイパスをしばらく行くと、右手の黒い山影の間に、まばゆい光でライトアップされたムーンブリッジが見えてきた。
「わーっ、チョーキレー!」
「ミカちゃん、どこかでちょっと降りてみない?…ねえ、適当に眺めのいい場所があったら車停めてよ」
車は、傍らの路側帯につけられ、ミカとキミカは車から降りる。
道路を横切ると、ムーンブリッジが一望に出来た。
「うーん、凄いですねぇ。やっぱ文明の力は偉大だなー」
「文明ねぇ…あたしは、自然も好きなんだけどね」
「そうですかぁ? でも、田舎とか行っても何も無いし、やっぱり都会がいいですよ。キミカさんみたいにカッコいい、都会の女って憧れちゃいますし」
柔らかい風が吹いている。二人の髪をそっと撫で、通り過ぎる。

うして岸井ミカを演じ続けることに、最近ミカは疲れを感じるようになった。その気持ちを癒してくれるのが、ユカリであり、チサトであり、アリサであった。しかもアリサは、子供のクセに時に鋭い指摘をする。
「ユカリ先輩みたいにカッコ良くて、チサト先輩みたいに女らしくて、アリサみたいに自分の主張を持つ」
それができればいいのにな、と思う。しかし、今のミカではどうやったらみんなみたいになれるのか、見当もつかない。
「……帰ろっかな」
ミカが席を立とうとした時、ポン、と誰かが肩を叩いた。
「こんばんわ。一人で飲んでるの?」
ミカが振り向くと、そこには見慣れない女性がいた。いや、見たことがあるかもしれない。
「あたしも人待ちしてて一人なんだ。一緒に飲まない?」
話しかけながら、隣に座る。ショートカットにオレンジのヘア・マニキュア。体にピッタリとしたタンク・トップとパンツ。ミカの周りには今までいなかったタイプだ。
「別にいいけど…」
「ありがと。あんた…ミカちゃんでいいんだっけ?」
ギクリとするミカ。改めて、隣の女性の顔を覗き込む。
「…なんで名前知ってるの? どこかで会ってるっけ?」
微笑みながら、女性が答える。
「話したことは無いけどね。何回か、ここで見かけたよ。ミカちゃん、雛代高校でしょ? あたしの知り合いが、何人かあんたのこと知っててね…有名だよ」
「えっ、いやぁ、それほどでもないけど…」
「あたし、キミカ。高橋キミカ。雛代の卒業生なんだ。よろしくね」
「えっ、じゃあセンパイじゃないですか」
「卒業したら関係ないよ、キミカ、でいいからさ」
「あっ、ハイ……」
キミカは饒舌だった。昔の雛代の話、クラブ・シーンの話、音楽の話…話題も非常に豊富で、ミカはすっかり打ち解けていた。だが、よく考えれば、キミカはミカをひきとめていたようにも思えたはずだ。それに気がつかないまま、時間が過ぎていく。不意に、一人の男が早足で近づいてきた。
「ごめんごめん、キミカさん。事故渋滞で遅くなっちゃって…」
キミカが少しムッとして、言う。
「遅いよ、全く!…まあ、ミカちゃんがいたから楽しくてすんだけどさぁ。ほら、ミカちゃんに挨拶しなよ」
男はおよそ、クラブに来るような格好ではなかった。変に着崩れた、無理して買ったようなスーツがあまり似合っていない。

「プロローグ」から続く出会い…
予兆
〜Yocyou〜

密接に絡み合う人間関係。どこで出会い、どういう関係で、その接点の意味は…。ミカとキミカの間には、ある共通項があった。二人の出会いはやがて、それぞれの運命を分ける。恐ろしい決意までの一瞬の刻…。

「ふう、ちょっと疲れちゃったな。耳がジンジンするよ…」
クラブ「LOST　HIGHWAY」でのイベント。どらかといえば、ミカはクラブ・シーンやテクノに興味があったわけではない。クラスのカヅキやミホが切り出す話題についていくための知識を蓄えておく必要があったからだ。流行っているモノ、最新のモノに関して、ミカが知らない、というわけにはいかない。岸井ミカという存在は、クラスでもっとも目立った存在でいなければならないのだ。それはミカ自身の自意識過剰からくるものかもしれないが、周囲がそうミカを仕立て上げる環境であったのも要因である。成長していくにつれ、ミカは男女問わず友人も増え、特に学校という共同体の中では、注目された。
「踊るのはいいけど、何時間もダベる場所じゃないよね…危ないヤツもいるみたいだし、可愛いミカちゃんが危険な目にあったら大変だよ…なんてね」
ダンスフロアを抜け、バーカウンターへ向かう。通路に座り込む男、密着したまま動かない男女。誰も、何もする気力が無いのだろうか。
「えっと、ダイキリ下さい。ちょっと薄めにしてね」
ドリンクチケットと交換でグラスを受け取ると、カウンターの端に座った。髪をかきあげながら、軽く一口飲む。ミカにとっては、アルコールも自分を演出する為の小道具に過ぎなかった。そ

「プロローグ」から続く出会い…
予兆
～Yocyou～
特別巻末付録
未掲載シナリオに基づいて
独自に構築した
「見えなかった部分」と
「終わりの始まり」
「エピローグ」の後…
輪廻
～Rinne～
文／藪中博章

このゲームはフィクションであり、
実在する団体・名称・事件とは全く関係ありません。

このゲームで起るすべての判定は、
ご購入された皆様の判断に委ねられます。

このゲームは1996年6月に企画され、
同月基礎開発開始、1997年1月ビジュアル作成開始、
同月より本格的な開発がスタートし、1997年8月に完成しました。

このゲームは制作者の意図により、ノイズ音を多用しています。

このゲームは日本語が理解できれば、どなたにでもプレイできます。

このゲームは1997年7月自主規制を行いました。

このゲームは「トワイライトシンドローム」の続編的作品ですが、
同一の登場人物以外は関連性のない、全く新しい作品として制作されました。
「トワイライトシンドローム」を購入されていない方でも、安心してプレイすることが出来ます。

～「ムーンライトシンドローム」マニュアルより抜粋

9784893675460

1920476010008

ISBN4-89367-546-X

C0476 ¥1000E

定価：本体1000円＋税

このゲームはフィクションであり、
実在する団体・名称・事件とは全く関係ありません。

このゲームで起るすべての判定は、
ご購入された皆様の判断に委ねられます。

このゲームは1996年6月に企画され、
同月基礎開発開始、1997年1月ビジュアル作成開始、
同月より本格的な開発がスタートし、1997年8月に完成しました。

このゲームは制作者の意図により、ノイズ音を多用しています。

このゲームは日本語が理解できれば、どなたにでもプレイできます。

このゲームは1997年7月自主規制を行いました。

このゲームは「トワイライトシンドローム」の続編的作品ですが、
同一の登場人物以外は関連性のない、全く新しい作品として制作されました。
「トワイライトシンドローム」を購入されていない方でも、安心してプレイすることが出来ます。

～「ムーンライトシンドローム」マニュアルより抜粋

月の光に魅せられて、人の心は狂気に満ちる。

ムーンライトシンドローム
Moonlight Syndrome

このゲームはフィクションであり、
実在する団体・名称・事件とは全く関係ありません。

このゲームで起るすべての判定は、
ご購入された皆様の判断に委ねられます。

このゲームは1996年6月に企画され、
同月基礎開発開始、1997年1月ビジュアル作成開始、
同月より本格的な開発がスタートし、1997年8月に完成しました。

このゲームは制作者の意図により、ノイズ音を多用しています。

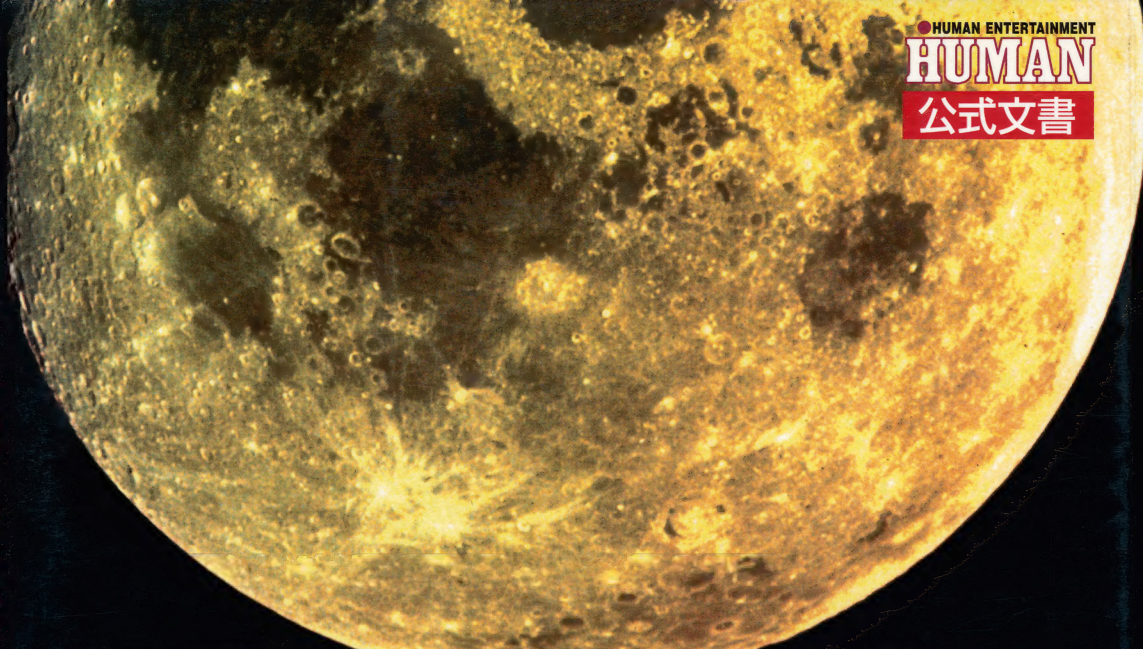
このゲームは日本語が理解できれば、どなたにでもプレイできます。

このゲームは1997年7月自主規制を行いました。

このゲームは「トワイライトシンドローム」の続編的作品ですが、
同一の登場人物以外は関連性のない、全く新しい作品として制作されました。
「トワイライトシンドローム」を購入されていない方でも、安心してプレイすることが出来ます。

〜「ムーンライトシンドローム」マニュアルより抜粋

9784893675460
1920476010008
ISBN4-89367-546-X
C0476 ¥1000E
定価：本体1000円＋税

ヒューマン公式
ムーンライトシンドローム解析文書
薮中博章／著
白夜書房

HUMAN ENTERTAINMENT
HUMAN
公式文書

コンプリート データ ファイル
【ムーンライトシンドローム】
Moonlight Syndrome
解析文書

薮中博章／著

白夜書房